北辰會雜誌

第拾五號

明治三十年四月十五日發行

（非賣品）

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第拾五號目次

論說

先天知識の有無を論す（承前）　講師　西田幾多郎
史海指針（其一）　教授　浦井鍠一郎

雜錄

無品親王服色考（承前）　教授　高橋富兄
体育私見　岩崎法賢
京都往復紀行　養愚子

文苑

ちりはてさる梅ゝ枝よつゝて友のもとよ　草野吹雪
歌六首　花廼屋吹雪
花筐　松下文樵人
代悲白頭翁を譯す　福井櫻園

〜のゞ草　淡翠迂人
俳句三十一句　教授　村上函峯
遊不言溪記　講師　浦井信
題夏禹治水圖　垂東仙史
映雪樓記
詩五首

批評

本誌十四號一瞥　磧川郎
與臨川子君書　藤馬卿

雜報

春風春雨。北辰會演述會。雜誌印刷の改。校內雜俎。本校出身者の現況。市村教授の新任。嗚呼七撰手。警鐘亂打。二學期試業。大島前校長閣下。泣言二つ。時習寮の近況。柔道部大會概況。二本勝負。退任の辭。

北辰會雜誌第拾五號

論說

先天知識の有無を論す（承前）

講師　西田幾多郎

先天智識の實在

余ハ前章に於て聊ゝ先天智識の意義を明にせり今ゝより進んで其實在を證せんとす而ゝて余が先天智識の定義ゝ由れバ先天智識と後天智識との差異は之を知るの順序方法ゝあらずゝて其根原ゝ在り卽ち此の二者ハ其性質ゝ於て相異なる者あり故に余が論定すべき所と「凡ての智識は經驗より導き得る乎經驗にハ豫想そべ如形式おき乎又經驗は如何して成るへき乎單ゝ感受作用のみなるの將た別ゝ總合作用なる乎」と云ふ問題是なり若し斯の如き作用斯れ如如形式ありとせば是余が所謂先天智識の實在を證し得ゝる者なり

然るに人或は以爲らく智識は凡て經驗と共ゝ始まるを以て經驗は唯一れ智源おゝと是實に研究に歷史的方法と物理學的方法とれ差あるを知らざるものなり先つて顯ハるゝ者必ず物の本性なるにあらず後れて顯ハるゝ者必ず物の本性にあらざるゝあらず凡そ物乃生ずる原因と場合とゝ由る佛教の所謂因と緣おゝる者卽是なり經驗ハ凡て乃智識を生ずる緣とおゝるは明なる事實なれとも未だ之を以て經驗は凡ての知識れ因なりと斷言すべゝらず此の如き誤謬は職として經驗の何ゝるを明に

せざるに由るなり

What is experience？ How is it possible？ と是實に大切なる問題なり之の問を解せずんば智識の之より來るや否やを論ずる能はざるべし然るに經驗とは其意義廣く且つ曖昧なり余は今之を最も狹き意義に解し凡そ內界外界の事物を內感或は外感に由て知覺するを經驗と稱するなり然らば則ち此の如き經驗と如何にして生じ得る乎人或は經驗を以て單に感覺力に感受作用に本いて生ずとなす者あり然れども單一なる感受作用より如何にして客觀的知識を生ず得るや感受作用より來る者は盡く極單一の結合せざる Mannichfaltiges なり之を言語に顯はすば唯 Interjections となる者なり「カント」の所謂智識は材料なるもなり是未だ智識と稱する能はざる者なり然るに之に反し苟も客觀的知識と稱する者は總合なる者なり一般として顯し得るものなり材料と形式と兩者より成れる者なり然らば如何して前者より後者を導き得る乎論者或は知識の形式も其材料と共に單に感受作用より來り得るものとなす乎吾人は未だ感官に由て知識は關係を感ずと云ふことを聞らず眼が直接に空間の關係を感じ皮肉が直接に空間は關係を感ずと云ふも皆俗人は言のみ眼より來る者は唯網膜の色感と眼筋の筋肉知覺に過ぎず皮肉より來る者と亦軟剛寒暑等の觸感と筋肉知覺あるのみ「ロッツエ」に從へば吾人が空間を直感するは皆唯感覺の Local sign に由る者となせり此の如き事實を少しく心理學を學べる者は皆知る所なり然れども此の知識の成立は決して感受作用より盡く說明し得べきもにあらず從て經驗は單に感受作用に由て生ぜざると疑を容るべざる所なり

果して然らば知識を生ずるにと之が材料を給する感受作用あると共に之が形式を與ふる作用なるべからず是所謂經驗の總合作用なり此の作用なければ經驗と知識を成すこと能はず而して此作用は亦二種の別あり一は連結作用にして一と判斷作用是なり故に今一知識の成立するに第一に外界の事物を感受する作用なかるべからず第二に之を連結する作用なかるべからず第三に之を他と比して判斷する作用なるべからず此の三作用は斯く抽象的に相分別し得ると雖ども實際に於ては相離すべからざる者にして三にして一一にして三なり苟も事物を知覺するには必ず此れ三作用其一を欠く可からず例之へば青色の物を知覺するとなれば第一に眼の網膜を刺激する極微のエーテル振動を感受なざるべからざると勿論なり然れども之を以て直ちに青色の理會を得る乎人誰の延長なざる青色を知覺し得る者ぞ絕對的に單一なる青色の感覺なる者安くに在る苟も青色の理會とあるは必ず空間の結合を要す是卽ち余れ所謂第二の連結作用なり又吾人と他れ理會と比して判斷するとなく去て青色の理會を知覺し得る乎所謂絕對的に無關係知覺なる者安くに在る青と云ひ紅と云ふ皆相比し相區別するに由て知覺を得るなり見る所盡く青ならば誰か青の青たるを知らむや又悉く紅ならば誰か紅の紅なるを知らんや青色なる理會は必ず判斷を待て而して後生ず是卽ち余れ所謂第三の判斷作用なり以上の三作用其一を欠けば則青色れ知覺なし其間實に前後と云ふべからざるなり是故に余は經驗には啻に感受作用のみならず一の總合的作用の欠くべからざる者あるを信ず

然らば余が所謂知識の形式とは何を云ふや余は已に知識の成立するに欠く可からざる總合的作用

ありと云へり而して此の總合的作用は隨意に總合するや必ずや其總合に一定乃形式なかるべからず是卽知識の形式なる者なり故に此れ形式あれば總合的作用なしかの總合的作用あれば經驗と成すと能はず此等の形式と實に感覺を總合するに欠くべからざるものなり卽ち經驗の豫想をべき必要なる形式なるなり而して連結的總合作用に屬する形式二あり卽ち空間と時間と是なり精神的現象は必ず時間に由て連結され物質的現象は必ず時間及空間に由て連結さる此の二形式は此等の現象が必要なる場合とある者なり故に數學的關係は凡ての現象に應用し得るあり次に判斷的總合作用に屬する者二種あり一には現實的範疇是あり卽ち原因及結果の關係の如きは精神的なると物質的なるとを問はず苟も現實世界を理會するには必ず豫想せざるべからざる者なり之なければ作用と云ふことなきあり作用あれば世界は一の幻影となるべき故に物動論は凡ての現實的現象に應用せらる二には形式的範疇なり苟も知識と稱する者は其現實と想像とを問はず必ず之を豫想せざるべからず故に之を形式的と稱す卽ち Being (It is) 及び Diversity (A is not B) の如き是あり論理學の Three lows of thought と稱する者も之より來るありAはAと同一なりAはBにあらずと云ふ如き判斷なき時は如何なる知識も成立する能はず何とあれば苟も區別なければ知識なく區別は卽ち之の範疇に由て成すべければあり故に論理的原理は凡ての知識に應用し得るあり以上述べたる所は皆經驗の基礎とあるべき形式にして余が先天知識と稱する者と之を云ふなり

上來乃論を總括するに經驗には感受作用と共に總合作用あり其總合作用の形式は卽ち經驗が豫想すべき Sine guâ non なりと云ふにあり此卽ち余が此章の始に掲げたる問題に答へたる者にして余が先天知識の存在を許すは實に此にあるあり然れども上に列せる範疇は先天知識なるを以て「カント」の云へる如く單に主觀的なりと云ふべからず余は此まで此れ範疇をば Principles of knowing として論ぜり然れども Principles of knowing なればとて Principles of reality たる能はずと云ふ理あらんや夫れ感受作用に由て生ずる感覺は固より主觀的なりと云へども是全く幻影なりとの義にあらず吾人が常に青物を青と感ぜざるべからざると客觀的の基礎あればあるべき然らば卽ち此乃感覺を結合する形式も亦全く主觀的たらざるべからざるの理なし夫の總合作用が必ず此等の形式に從ふて總合せざるべからざるは是其客觀的の基礎あるの證にあらずや「カント」の如く感官を以て現實世界を見るは唯一の窓戸と見做し之より來らざる者は皆主觀的とあるは少しを偏見に失するなき乎固より外界の物質的現象は感官より來らざるべからざるなり然れども元來範疇は如き者は場所を以て分れ居る者にあらず又物理的作用の如き甲より乙に移り行く可き者もあらず範疇は形面上に者あり而して Principles of knowing あると共に又 Fundamental principles of reality なり吾人は範疇あるくして一物を考ふ可からざると共に一物も此れ範疇に由て成らざる者あし一粒の砂土も無邊の宇宙も唯一は範疇に由てなるなり故に余は範疇が客觀的ありや將主觀的ありやと云ふ問題已に誤れりと考ふ何とあれど余輩が心と云ひ外物と云ふは既已に範疇を豫想し此に由て論ぜる者なり而して更に範疇の確實を問ふは自家撞着と云はざるべからず然れども論者或は云いん余の所謂範疇なる者は空なる者あり物の關係たるに過ぎず之を現實とあ

す一の空想なりと然れども余は所謂範疇とハ物の根本的關係なり何故ゝ此の如き關係を現實と稱する能ハざる乎凡て物とは關係と材料とより成れり猶「アリストートル」が物体ハ材料と形式とよりなるとなすが如し若し物より之を成なる材料と除去する時は其者なきが如く又之より其關係を除去する時は又其物を消滅するなり兩者相依て始て一の物体をなす故ゝ材料を現實は一要素となすと共ゝ範疇を形式の基礎として亦現實の一要素となす何の不可か之れあらん終りに又 A priori 義に就て一言せざるべからず若し知識に於ても現實に於ても材料と形式とは共に欠く可からざるものとせば何故に一を先として一を後と稱するや前者は物の不變且つ必要なる基礎にして後者は之れに變化且つ偶然なる者なり例令ば外物ハは空間が不變且つ必要なる基礎となり色音等は之に偶然且つ變化を得る性質なり空間のみまて外物をなす能はざるは勿論なれども空間なけれバ外物なし然るゝ色音等ハ之なけれバ外物なしと云ふとなし例令へば觸覺のみにても外物を理會じ得るなり故に形式ハ至要ゝして色音等の材料は緊要ならざるものなり是余が知識の形式を以て先天と名くる所以にして即ち論理意義の Prior なり若之隨時に云ふバ形式と材料と同時ゝ始まり形式なき材料なく材料なき形式あるとなし

（未完）

史海指針　其一

教授　浦井鍠一郎

Some histories are to be read, some to be studied, and some may be neglected entierly. Some are the proper objects of one man's curiosity, some of anothers, and some of all mens, but all history is not an object of curiosity for any man. He who improperly, wantonly, and absurdly makes it so, indulges a kind of canine appetite. They heap crudity upon crudity, and nourish and improve nowing but their distemper.—Lord Bolingbroke

實に諸般の學術各專門のリテレチユアを有し汗牛充棟適當なる參考書を得るに注意せざるべからずと雖も史學ほど其困難にして又最も注意を要するハ尠うるべし何となれハ史學の關する所は殆んと無限にして從て史書と萬を以て算をへく歷史の論する所は盡くる所を知るへからす上下三千歲民衆幾百種各特種の經歷を有すされは二三千頁ある名ある歷史ゝして其記する所僅々半世紀ハ止りしるも一國民れ事蹟ゝ過さる者尠のゝす佛國史の上乘といいるゝ者ハ實ゝ一萬頁を有し一女王の事代を記するに十二卷の書を以てするあり有名なるマコレイ卿か英國史を著はしや其ある章を綴るたゝゝは實際其事蹟よりも多くの時日を費しゝといひ近來オックスフード大學部内に行ハるゝ風評によると同大學の教授は英國革命史を編む計畫ありて其爲めにハ革命と同一の歲月を費すが決心ありといへり此比例にて進まば完然なる萬國史を得むには勢約四千年を待たさるべうゝず驚くへき話といふへし

如此限無き歷史記錄年代記傳記の茫々たる大海ゝ乘り出て如何にして正當の航路を失ゝず適當なる書を撰み出をへきか倒底四萬卷を讀破すべからず四千卷も四百卷も覺束なき業なりたゝ最も適當なる書を撰み最も僅小の時日を以て最も有益なる結果を收むへゝのみ何れれ時代何れの國民何れの運動何をの書を讀むを以て最も興味多く最も有益とすべきか此問題に對しては米國ミシガン

大學教授キャーレス、ケンドル、アダムス氏の A Mannal of Histrical Literature for the use of Students, General Readers, and Collectors of Books あり約一千八百種乃ヒストリカル、リテレチユアを收め逐一短評を附したる者にて歴史家座右乃珍とすべしされど頁數七百を超ゆるが上に氏の評は萬遍なく愛敬を振り撒き口を極めてスキントン氏の萬國史を賞揚して萬國史の最上乘とおすゝ如く人をして取捨に苦ましむ最も簡便なるゝ Allens' Historical Topics の附錄なる史籍れ表にして是は重に英書を蒐めたり獨逸書にてハ獨逸書店同盟組合より出版せる Kompendien-Katalog の第七冊 Geschichte und Goodraphie を以て最便とす但し余ハ專門に歴史を研究せゝる丶人に向ひ釋迦に説法を試むるにあらず普通高等教育れ素養ある紳士にて社會に立ち夫々專門の業務に從事するの餘暇讀書の樂に耽ふむとする人々に對し殆んと有害無益れ小説三昧を癈して有益なる歴史を讀まんことを熱心に勸告せむとすべーコン言はずや乘馬は人をして健康なら玄め讀史は人をして智者たらしむと而して余は讀史論を主張そると同時に最も其選擇に注意を望む英國の學者常に獨逸の學者を罵りて曰く彼等は單にブックマンなり器械的に書を讀み器械的に書を著ハそ恰も牝牛ゥ草を食ひ牛乳を出すゥ如く牝牛を乳を出し學書ハ書を製すと酷評といへとも多少れ眞理おきに書籍の數愈よ多くして選擇れ必要愈よ急なり古人言ハずや盡く書を信せは書なれに如かずと

先つ第一必讀すへきはヘロドタスれ著なり「此書は歴史れ祖父」の著したる眞れ歴史の濫觴にして苟も歴史の二字を口にするものハ必讀すべれものとす此人ハ小亞細亞西岸カリア州れハリカルナソスに生まる(紀元前四八四年?)早くより歴史を編む志を立て遠近を論せずして盡く史上れ舊蹟を探らむと欲を漫遊を始めたり其時日及ひ範圍に關してハ衆論一致せず正確なることを知るを得されともヘロドタス自身れ言に從へバ先つ小亞細亞乃海岸及ひ島々に遊び次ホ數回埃及に赴き後フヒニシア、バレスタインに遊び更に東方スーサ、及ひバビロンの舊都を訪ひ猶厭き足ふで地中海の島々に渡り又黑海沿岸れ地を歴遊を南阿刺比亞埃及の沙漠を究め西キレーネ以太利に及びき渠ハプロピレア (Propyloea) を見れといへば此堂の成りたるペロポネサス戰爭れ始めを即ち四三一年頃ハ阿典府に在りしと見ゆ渠と其故郷の爲め頗る盡力し波斯知事れ壓政を免れしめむことを勉めたれとも元來渠の主義ハ所謂温和的自由主義なりしを以て過激なる民黨と衝突し去て以太利なるキユリイに退けり渠の歴史と晩年此地に於て成れりとの説眞ホ近さが如し

渠の歴史ハ希臘と波斯との大衝突即ち亞細亞と歐羅巴文明と野蠻と自由主義と壓政政治との衝突を叙述するホ在りて此二者の衝突と決を玄て偶然に生したる鬪爭ホあふすして其來る遠且深きを證明せむとせり渠ハ或ハ土人に訪ひ或は古蹟を探りて史料を蒐集し之に加ふるに批評的觀察を以てし原因結果れ理を推し猥りに虛構乃事實を傳へず書中往々曰く僧侶余に語る如此而して余も亦しか思ふと以て彼の經營慘憺たるの狀を察すべしとなす勿論ヘロドタスの始て史海に乘出るや事創業に屬し且つ其時勢は到底今日の如き科學的研究を行ふ能ハさりを玄に因り最近の研究の爲め誤謬の發見せられたる事尠かふさるは止むを得さるなり兎ホ角ヘロドタスの誤謬は眞の誤謬にして決を玄て渠の虛構若くは怠慢に出たるにあらすされは一時は是等の誤謬の發見と共にヘロドタスを貶

ずの聲盛なりしかど近來は其反動起りて曩の批難の聲は賞歎の聲に變せり其一例を擧くればヘロドタスの埃及の記事中に曰くナイル河に鰐魚を產する事多し此獸冬季四月間は絕食を四足獸なれども兩棲類に屬し卵生にして其卵を砂中に產む晝間は多く陸上に在れども夜に入れば水中に潛て出てず蓋し水中の方陸上よりも暖き故なり從來余の知り居る鳥若くは獸にて此動物ほどに生育の速なるを見ず其卵鳶鳥の卵より大からず其始めて孚化するや比較的に小かれども其發育するや十七キユビツト(人の臂より中指の端までを云ふ)に過ぐるあり其眼は豚の如く其齒は身體に比して甚だ大に他の動物の如く舌を有せず特に奇なるは上下腮を動し得るのみ足は堅牢水搔を有し皮は堅牢なる鱗を以て保護せらる陸上にては視覺甚だ銳しと雖も水中に在りては物を見ず此獸は多く水中に棲息するを以て其咽喉にも蛭常に充滿し鰐魚甚だ苦む他の鳥獸は敢て近かずと雖も獨り蜂雀のみは毫も恐るゝ氣色なく鰐魚の陸中に在る時は常に西面して沙上に横臥し廣く其口を開くを以て蜂雀は其口中に飛び入り蛭を退治し鰐魚の憂を除く鰐魚は之を德とし決して之に危害を加ふること無し埃及人の一半は鰐魚を崇尊し一半は之を敵とすセベス市及メーリス湖畔の住民は甚だ鰐魚を尊崇し之を捕へ其耳を飾るに黃金又は寶石を裝飾を以てし鐵鎖を以て其前足を縛し逃る能はざらしむ之を養ふには神聖なる犧牲を以てし其死するや先つ之を木乃伊となし次て之を靈柩に納む之に反してエレフハンチン地方の人民は尊崇せざるのみか之を敵とし之を捕へて其肉を食す之を捕ふるは法種々あり其一は豚肉を鈎針に附着し中流に浮へ河岸に生豚を携へ來り之を鞭ち悲鳴せしむ然る時水中なる鰐魚は之を聽きて陸地に來ふむとし途中の餌に懸れば徐に之を陸地に引寄せ直に泥土を以て其眼を塗り其狼狽するを窺て生擒すと此記事は人の信ずる者なく皆以て好事の虛構談となせしが最近の研究に依れば全く實際の事實なりといふ爲めにヘロドタスは名譽恢復せられしのみならず非常に其崇拜者を增加するに至りた兎に角ヘロドタスの目的は最も正確に最も明了に東西兩洋の大衝突を叙するにあるて彼の歷史は一種の散文的詩歌といふを得べし歷史の傳ふる所に依れば彼は晩年オリムピア祭禮に臨み群衆に向ひて其歷史を朗讀せしにスキデデス歲甫めて十五歲感極まりて泣き人々感ずる餘り其著九卷に命ずるに各希臘九騷神(ミューズ)の名を以てせりといふ

ヘロドタスは英譯種々あれども最良なるは Canon Rawlinson の英譯 Herodotus. A new English Version にして一千八百五十九年倫敦出版四冊にして米國反刻の價八弗なり此書はサー、ヘンリイ、ローリンソン、弟ジョージ、ローリンソン及サア、ウキルキンソン三人の手に成る精密なる註釋圖解地圖を加へ猶近來の發見研究の結果を述へてヘロドタスの誤謬を訂正したる者にて最も大切の者とすサア、ヘンリイは東洋に駐在する事久しく後バクダット府駐劄領事たり有名なる東洋學者にして彼楔形文學の解釋者なりジョージも亦東洋學者の錚々たる人にて其著古代五大王國ありウキルキンソン氏は埃及學者として有名なる人なりヘロドタス本文は釋ボーンのクラシカル、ライブラリイに收めたり(價三シリング半)

人或はヘロドタスを以て陳腐なりといふものあるも然れども之を以て古代史研究の基礎となすべきこと恰も既に陳腐の批難を免れざるコークス若くはブラツキイ等は依然として法學者座右の珍

さるに同じ而玄て人若〜ヘロドタスを讀みて有益なる結果を收めむとせは極めて秩序的なるゲッチンゲン大學教授博士ヘーレン氏れ英譯 Heeren — Mannal of Ancient History を併讀するを以て最も便なりとすれども該書は既に數十年前の出版に係り其後新發見の事實頗る多く大ゐ訂正を要するゐみなふず此英譯書は稍や得難きを以て寧ろローリンソン氏の著 Mannal of Ancient History の方を適當とす此書い一八七八年オックスフォードの出版にて頗る高價あれども米國の飜刻い一弗半に過ぎず此書ハ要をるゑヘーレンの著と同一のプランを用ひ同一の事蹟同一の年代を叙しヘーレンと大徑庭おくた丶所々煩ゐ過ぎ無用の事實を列記して動もすれば讀者の厭惡を招き易くゲッチンゲン教授れ如く炬れ如き眼光及ひ統一的觀念を缺けとも其代りヘーレン後れ新發見を收先たれは優に此等の缺點を償ふに足りヘロドタス愛讀者ゐ好伴侶たるを失はず

然り而して埃及學及ひ亞述學ハ今日ゑ至るを未ゑ堅固なる立脚地を有せずして續々古記錄遺物の發見ありて昨是今非の歎なくんゞゐふずオックスフォード大學古代史教授ゑして亞述埃及學者と〜て有名なるセイス氏 (Prof. Sayce) ハヘロドタス攻擊派れ將にして熱心にカノン始めローリンソン一派れ歷史は今日に於て既ゐ陳腐ゑ屬する者なるを論〜ナイル及ひユーフラーテス平原の歷史は全部を擧げて書き改めざるべからざるを主張すされど今日に於て一般史學社會れ傾向は寧ろ冷淡に〜てセイス氏の重大視する輓近の發見い左ほどの價値あるものと考へざるが如〜此等れ新發見に就てハヂユンケル博士 (Wax Duncker) の古代史六卷の英譯 History of Antiquity 倫動及新育出版四卷の埃及及ひ亞述に係る第一卷及ひ第二卷を參照するを以て充分ありとをグラッシュ博士 (Grugsch) の著の英譯 Grugsch — A History of Egypt under the pharaohs. London 二卷い頗る有名ある者なれど是い全く埃及れ古碑文のみゑ依りて編纂せ〜ものにて寧ろ專門に屬し一般讀者に對〜ては其要を見ず若夫れ進んで古代の宗教風俗慣習等ゐ就て探ふむと欲せゞ Wilkinson 氏の Mannels and Customs of Ancient Egyptians. London 1858 或は英人 (但し巴理ゐ生る) にて有名の外交家及び古物學者なるレアールド氏 (Layard) の Ainireh and its Remains 偖は最新の出版にて前述セイス氏の Ancient Empires of the East 最も宜〜其他種々あれども略す序に至りて簡單なる埃及史は最近續々出版せふれゐる歷史叢書 Stories of Nations の內なるジョージ、ローリンソン氏著埃及史ゐり此叢書と何れも煩簡其宜を得通俗的あれとも最近研究の結果を收めたり (價一弗半)

以上ヘロドタスの大要を述たるが實を言ハゞ此書ハ頗る大冊なるを以て全部通讀と稍や多くの時間を要を因て僅少の時間を以てヘロドタスの一斑を窺ハむと欲する人ゐふば余は特ゑサイラスゑ波斯建國埃及地理舊蹟風俗論及ひマラソン、サーモピレエ、サラミスれ三章を讀まれむことと勸告と是等の章ハヘロドタス史中の鏘々たるものゑて夙ゑ壓卷れ稱ゐり歷史の祖父か其椽大の筆を振ひ東西兩洋の大決戰を寫し出すの所絕世の偉觀に〜てアリスチデスの德ミルチヤデスの勇レヲニダスゐ義セミストークルスの智躍然として紙上に現ハるを覺ゆ小年用書なれども Church 氏れ Ttaries from the East 及び Stories from Herodotus は亦ゑ以てヘロドタスれ一斑を窺ふに足りカツセルのナショナルライブラリイに收めたるハヘロドタスの埃及とスキジアの記事なり拾錢

銀貨を投ずれば此歴史の祖父の面目の一端を窺ふを得べく少くとも此書は一讀せざる可からず。

（末完）

雜錄

無品親王服色考（承前）

教授　高橋富兄

富兄按ずるに、村上天皇の制と云へば正しき樣なれども、物に見えざれば覺束なし。上に云へる如く令及び式に載されば、紫なること疑なけれども、式文を讀み誤りて黃袍なりと心得て、臣下だちの云たてしなば、何時その定まれる如くにあれるにても有る可し。此の黃袍を用ゐたる度ごとに公卿だちれ說ありてひが事ども少からざりき、其い左の如し。

○小右記（小野宮右大臣實資公）曰、長和二年三月廿二日（紀元一千六百七十三年）甲寅、今日今上（三條天皇なり）二三親王（敦儀敦平）加元服云々理髮人等進而理髮訖退出、次而親王退下（皆着赤色童裝束）下侍所改服（黃衣）云々、少時而親王着黃衣、入自仙華門、於東庭拜云々、仰敦儀敦平親王等位記事（三品）云々、兩親王着位服、入自仙華門、於南廊拜舞

○玉海（月輪攝政兼實公）曰、寛治元年丁卯六月（紀元一千七百四十七年）、輔仁親王（後三條天皇れ皇子なり）元服之時、大殿依令申給爲綠色云々、

○又曰、（崇德天皇）保延（五年十二月廿七日、紀元一千七百九十九年）、鳥羽法皇給綠色雅仁親王、見親隆記。又院慥着綠色之由有仰。

鍈抄云、淺黃親王着之、保延五或秘記曰、雅仁親王元服、諸卿等相談曰、無品親王着黃衣、或曰謂之淺黃、專不分明、宗能卿曰、是黃色之薄也、予曰、或記曰親王着黃衣、其注曰其淺黃也世稱之黃衣、或記曰着綠袍云々、以上推之、猶淺黃色歟（指實保也）宗能曰、淺黃者是心喪色也、豈可用哉、余又更不口入、予心中雖存無其謂之由、更不出口外、舊亭後勘日記、「長和二年三月廿三日行成記曰、新冠兩王着黃衣（其淺黃色也稱之、黃衣）、「寛治元年六月二日御曆日着綠表衣給云々、改着男御裝束綠御袍淺黃也、世稱之黃衣、面小葵練之、裏同色平絹同練張之、有文御帶、件御裝束自此前自待賢門院（雅仁親王の母）被調進也。

○台記（宇治左大臣頼長公）曰、久安六年（庚午紀元一千八百十年近衛帝御宇）十月廿三日乙丑、新大納言傳詔鳥羽法皇曰、重仁親王（崇德帝皇子）元服（年十二）夜袍色如何、其意趣宜載狀、奏聞者報狀曰、無品親王用黃衣之由見西宮記（臨時）又縫殿寮式有所見、（淺黃即薄黃色也）可用薄黃色者（縫殿寮式に所見あるとも淺黃も綠にあらず薄黃なる由見えたりとなるそれも染草よ依りて知らるゝなり。縫殿寮式云、淺黃綾一疋、（綿紬綜紬東絁亦同）苅安草大三斤八兩灰年二升薪卅斤、帛一疋苅安草大二斤、絲一絇苅安草大十一兩灰二升薪廿斤）。十二月一日癸卯傳聞今日重仁親王加元服、被用黃袍、如余所奏右大臣加冠親王叙三品云々、依美福門所養也

○王海曰、建久（後鳥羽帝の御宇）二年（辛亥紀元一千八百五十一年）十二月十四日戊子、此日左大辨定長爲院御使、來令宮（守貞親王）元服之事（守貞親王建久二年十三月廿六日元服叙三品年十三號後高倉院）條々被仰合也

御袍色事

定長記云、舊記云黃袍云々、又云淺黃云々、謂淺黃薄き黃色也非綠色、隨又或文(式歟)にも染淺黃之處に苅屋須を出ぬり、爰知謂淺黃也。代々記稱黃色、已以符合、而保延法皇給綠色見親隆記、又院慥着綠色之由有仰、又寬治輔佐親王元服之時、大殿依令申給、爲綠色云々保延任彼例、故叙令申之由有所見。然者於道理者黃衣顯然、於近例者綠色也、今度可就正說歟、可依近例哉、可令計申者

余申云、愚意所存正說卽淺黃也、是綠色也其故者、長和二年權大納言記云着黃衣其淺黃也世稱之黃衣、如此文者無疑、以綠稱淺黃也、其故乞只爲黃色、何故可有此注哉、爲不令迷后代之人、聊錄子細、實故賢之用心尤足歎美、若只爲黃色、子細之注錄無大據、殆有重言之艱歟、彼此之人更不書無益之一筆、況於如行成哉、上古之證以之爲是。至于或文(式カ)者、卽淺黃にも聊可有黃色、近代偏薄縹色也、是誤也、然者淺黃之染草出苅糟爾、非疑殆也。何況寬治元年故京極大閤記、慥注綠色之由、是又中古之證據也。永久(三年)有仁(年十三)花園大臣(花園左大臣源有仁は輔仁親王の子なり)元服袍爲綠之由見中御門右大臣(宗忠)記、保延之例可謂規摸。然則雖無他例。縱雖爲失誤、被追保延之日、爭不可違其例、況於有他例哉。況於行成錄子細哉。上古中古近代、皆以有其證、今度不可及異議、可被用淺黃綠色也者也

同文裏幷闕腋縫腋事

定長云、保延親隆記云、文雲鶴闕腋云々、不注裏有無、永久爲隆記云、無位袍單無裡云々、今度如何者余申云、於文者保延分明者、只一向可被追其例、或說宇治左大臣記也然而不顯其記也然而親隆奉行云々、專可被用其說歟、但闕腋之條頗不審於童服者闕腋也、元服以后用闕腋之條、其理如何、隨代々記不見此事、猶可被尋歟、

裏來(本ノマヽ)爭保延定其裏平絹之由有所見、可依彼例歟云々、已上被尋問事如此

廿六日庚子、此日二宮御元服也守貞親王也稱今宮、於法皇六條宮有此禮云々、一向被追保延例法皇御元服也云々、依召進被袍等、使藏人右衛門權佐長方也大文表衣打裏袍襖用正儀置蒔繪衣筥蓋、以打裏裏之、笏漸造也以檀紙二枚裏之、加納筥內、納長櫃直衣仕下持之相副下司了云々、後聞御袍綠色縫腋云々、

愚昧記(三條左大臣實房公)曰、建久二年十二月廿六日庚子、今日今宮守貞親王高倉院第二皇子母七條院、聖上同胞兄也有元服事云々、日沒之后親王入自西障子、着奧座、赤色浮文織物闕腋袍。(小袋文裏司赤色也)打下襲如恒、黑半臂。縮綾表袴。有又玉丸鞆帶。揖橫目扇(以纖糸曹如常)總角有夾形云々叙品勅使參上之後、着位袍、取笏被拜歟、其間事可尋註。

裏書、後日大宮大納言示送云、關白被進御袍笏等事裏打裏置蒔繪衣筥蓋鶴含松枝蒔之笏以檀紙裏之入袍下也使藏人右衛門權佐長房也、袍文立涌雲歟云々

親王幼時裝束、綠色袍雲鶴文綾頗强張之單也無裏端撫之縫腋也、此袍之事先日有尋申黃衣之由了縫殿寮式雜染用途見之。又西宮云注黃衣之由故也、無位之袍也、而保延法皇御元服之時、着綠衣給了見寬治元年京極大殿記云々輔佐親王元服也舊配等注淺黃也。付淺字有此案歟、猶不可然。淺黃薄黃也但偏任保延之例有沙汰、法皇綠色之由有仰云々、關白又被申此由云々、下重以下物如例、紅打袷同色袷單袷也、般富門院被調進云々

○玉藻(光明寺關白通家公)曰、建曆二年十二月二日大納言被來、親王(後鳥羽帝皇子雅成親王)元服年十三、建曆六年壬申紀元一千八百七十二年袍色、爲薄黃申有上皇仰云々、尤可然歟、見久安六年十月廿日宇治左府記三日云々、左府云親王元服袍殊以有沙汰、綠色之由被記、就中京極殿法性寺殿、御案文同而式文分明之上久案宇治左府案當理心得也、以被尋問之時綠色之由可申也。不可違先祖意趣

之故也、於道理者謂淺黃薄黃物也云々、予答尤可然之由了、自本愚案又如此云々、又被談云々、給加冠之由云々、又云可被加御袍否、昨日有尋、不可被加之由令申了、其故長曆治曆加了、二束記艱之、又上皇御袍色正義深紫色也、不可給臣下事也、就中保延不給吉例也、久安有沙汰被加已不快例也云々無品親王袍色事尋申了差副遣便也。五日松殿返事云、故人有所迷歟、但淺黃綠色也之由有所見歟、仍可依此說者也云々、尤可然云、

飾抄(土御門大納言通方卿)云、案、先年六條宮元服之時、袍色有御沙汰、薄女郎花也、有黃氣者。

世俗淺深祕抄云、無品親王袍色薄黃與淺黃也。是先賢異議區也、或文紫云々、倩案此事猶可爲薄黃、但聊可有青氣、行成卿記猶注黃色之由、就件記猶執淺黃由輩中古多之。然而爲黃色也、攝錄家輩記云、多注淺黃由云々、如太政式者、可爲紫由注之、然而端注無品親王、更文親王者紫云々、所謂此親王、四位以上親王也。(富兄按ずるに之れ誤解なり。初めに無品親王云々と記せるに、此條の大綱として、凡て無品無位親王や諸王內親王女王の事と云るなり。次に親王紫と在るは、その無品親王は紫を着る由を記せる目あり、有品親王の紫なる事に、既に令に記されされば、式に於て別に記すべきに在らず。無品親王の服色に令にても慥かならざる故に、式に此條を殊更に設けて判然さらしめたるなり。此處に太政式と在るは彈正式を云るなり、若くも文字に誤り歟、彈正を太政と心得違へたるなるべし。式文と或記の文とを並べ論ずたるを以て見るべ、西宮記に黃色と云ゐるは式后に改まさる制なれば在らじ、改制あらば式文を引くに要なき、畢竟式文を誤解して此の論の如く心得たるに依りて、無品親王も衣服令に、无位は黃袍に由あるを、無品も同じ事と心得て、西宮記には黃色と記せるあるべく、高明公のみならずその頃の官人等は、皆然心得てありけん。親王のみならず諸王も皇族故に、臣下と等し並のあはかひにはあらで、諸王すら五位にても紫を着る御定めあるに、況てしや親王をや)。或書曰、說者云親王者四位以上也、無品有別式云々、以此文案之、彈正式親王四位以上之事也、或載無品不位袍色、是彈正式者、爲糾斷後政者有違失式也、然問無品親王、無出仕公事、仍親王注四位也、所註彈正式文如此。(富兄又云、是最强解あり、四位以上の紫なる由を註するならば、初めの無品親王と云へると徒事となるあり、無品親王と書きながら、ろの事に云にずして四位以上の親王の事と云て聞も可き者ならんや、あまりの强解あり、斯る文法も世に在るものにや)。凡無品親王、諸王內親王女王等衣服色、親王着紫以下、孫王准五位、諸王准六位(其服色者用練)。(孫王准五位とも無位孫王と位あけれども、五位に准ずて五位ろあつかひなり、衣は五位に當色緋を着するなり。孫王は蔭位にて四位に叙するなれば、叙位だに在れば四位ながら臣下と違ひ紫を着るなり。臣下は二位ならでは紫に許さるざるなり。將た无位は黃袍なれども、孫王は无位にても緋を着る御定めなり、三世四世の諸王と無位あれば、六位にあつかふあり。されども六位の當色と綠なるを、諸王に纁を着るあり、此の色緋の黑みあるものにて、緋と綠とに間の色となせるあり、諸王も叙位あれば五位にても紫を着るなり、此の孫王諸王の无位あるにても、親王の无品なる事に一しるし。論者の不文あることあやしきまでにおん)。就此文存紫由、非無其謂、然而以令文案之、曰猶可爲紫者有相違者也、衣服令曰、親王諸王諸臣一位以上并深紫衣、三位以上淺紫衣云々。(衣服令に諸王禮服二位以下五位以上、並淺紫色と在るを見ずや、三位以上淺紫衣とは諸臣のさだめなり。己が愚說を張ふんさめ令

ゐ判然たる文のあるを引のざるは、己目を塞ぎて人も見えぬ者と思へるなり、穴愚かや」。就中無位衣黄云々註無位所註曰諸人服又同也云々、然者在親王同此中條勿論歟。〔衣服令无位の義解に謂、庶人服制亦同也とあり。此庶人を諸人とゐやまりて、親王をも其中に在りと云へる、馬鹿も亦甚しと云ふ可し。凡て令乃文い一種れ規則ある正し兒文法にて、他の散文とハ同じのふず、能く讀までは義理の取り惡くき事あり、論者の如くろゞろに讀みてい誤解の出來るも最ものゐとおり」

体育私見

岩崎法賢

予が本日貴顯紳士れ面前に於て、又數多學生諸氏集合れ席場ゐ於て、平素れ所思を述ぶるハ、予か最幸榮とそる所也。

凡そ世人体育の目的とし、いへと、唯身体の强健を意味そるが如く思ふ、固より体育れ目的ハ、柔弱なる体育をして、剛强ならしめ、健全なる身体と益强壯ならしむるい、それ主要なる部分なりと雖、尚ほ一部分たるに不過矣、然らと果そて此他ゐ如何ゐる目的ありや、曰く骨格天賦の配置を保ち、以て强固整齊に發達生育をゐし、身体種々ゐる事業目的れ爲、有用的に活動する身体四肢の筋肉を練習するにあり、また体勢の整正なるは、大に威儼を保つゐ必要にそて、座作進退共に体勢整正たらむか、其人の威容自然ゐ備はるれみならず、又大ゐ内心の助とゐるもの也。

然り而して、運動の方法い種々ありと雖、それこれを撰擇するに於ては、土地及交通の便等、種々の方面より觀察して、最利便ゐるを撰はざるべのふず、然らは何をか能く前述れ目的を達するに足るものとゐすか、曰く武藝之也、或人言ハむ武藝可ゐと雖、稀時怪我を招くのとならず、その動作痛劇人体に適せずと、勿論怪我の如きと、忌むべ兒とおりと雖、要するにろれこれを招くは、不熟練の時ゐ當りて、無法と犯すに因り、稀に生ずるものにして、予未たゐれが爲に、生涯不具となりしものゐるを聞かず、況んや些少の苦痛困難に堪ゆる習慣を身ゐ附するい、將來複雜の世に處するゐ當りて、最要的なるもの也、如何ゐ安全利便のものと雖、常則以外に脱しなハ、渾て危險ゐらざるはなし、之に反し常則以内に馳驅せハ、如何なる難事も、敢て危險を見ず。

抑々武藝ゐるもれは、歴史上吾人の祖先が、之を以て獨立を維持し、我國光を毀損せず、皇統連綿今日に迄りたるものなれは、よしや時代は異るとハ言へ、今日吾人ゞ、之を修業して、祖先の遺志を繼ぎ、國の元氣を沮喪せずして、此を發揚活用を得べき身体を練磨養成せざるべのふず、又ゐの武士道よりそて、吾人ゞ精神上感化を享くるの効ハ、偉大なるもの也、何者苟も武藝を修業するものい、平生沈着にして、臨機の變に應すべき決斷心、亦廉恥義俠の心を養ひ、品性を高くするといふが如き、先年支那れ丁汝昌が威海衛れ守を失ひ、降を軍門ゐ乞ふて自殺するや、我が艦隊司令官は、特に戰利艦康濟號を與へて、ろれ死屍を廻送し、且つ禮砲を放ち、哀悼の意を表したる時、外國人れ内にと、虚禮と視做して、邪推を下しゐる樣なれども、これ日本の眞髓を解せざるもの、輕率も亦甚しといふべし、蓋し日本の德教ハ、神道佛教將ゐ儒教等れ、感化傾向種々ありと雖、ろの孰にも偏せざる也、殊ゐ武家にありてハ、武士道卽ち德教ゐそて、素より明文の據るべきなしと雖、古來れ諺ゐ

「武士ハ、相身互」といふとありて、例令敵味方として、勝敗を決するも、勝者は勝を誇らざるのみ、却りて敗者れ心を汲み取り、自己の上に算して、温情を盡すを親切なるをいふ、卽ち禮意に加ふるに、弱者を窘めざるの義侠心を混じて、無限の趣味を含蓄するもれと知るべし、在昔石田三成が、關が原の戰を破れて、擒となるや、德川の諸將多くは之に嘲笑を加へたるに、獨淺野長政のみ三成の心事を察して、特に之を禮遇せり、といふが如き美談を種として、父老が爐邊の談話、卽ち子弟修戒の根本なれば、其美談中より生したる相身互れ諺の如きハ、決して尋常一般の語ハ非ずして、經典の一句とりも重く、今尙日本人の志想を支配するものなり、斯れ如き美談を算ふれハ、枚擧ハ遑あらず、亦勝負法としても、今日世界の表面和氣洋々として、四海皆友れ觀れども、一朝風雲の生ずる時ハ、昨日の朋友今日の讐敵にして、國家警護の機關存するあるも、社會は不用公衆の保護を依賴を能ハさるとれハ、吾人自己に於て自衛の必要あるもの也。

亦今日社會の狀態より論ずるも、世れなるべく進歩して秩序的となり、亂世的れ一躍千戶侯の幸運ハ、敢て望べくもあらず、況んや人にハ、天稟の才あるもあるべく、修養熟練れ力に因るもあるべし、人の遇不遇ハ、時運に由ると多くして、相應の手腕を有しながら、之を振ふの機會なくして、半生を經過して、后年に至りて幸運に際會するとあり、蓋し人れ才能には、早成晚成あるべ也、故を吾人天壽を全ふすることを勸めずむハあるべからず、例へと德川家康公の如きも、大英雄にして、一生れ經歷も亦甚だ幸運ありしと雖、若し豐太閤在世時に、不幸辭世をあらしむりあらは、天下統一の大業は、到底遂ぐべからざるれみあらず、或ハ關原前后人心れ未だ定まらざる時に於て、其事あるを

するも、三百年太平の創業ハ、覺束なかるべしならむ、抑も人間の才力ハ、修養と經驗とを由りて、發達するに相違なしと雖、其には自ら限ありて、人類平等たるは、決して望むべからず、又運不運も時れ走馬燈にして、人力の以て如何ともなしべからざるもれありと雖、人の壽命に至りては、生來虛弱れ人に非ざる以上は、平素の攝生如何に由り、天命を全ふすると敢て難みあらず、されば不幸にして志を得ざるものも、生涯の中には、大を力を伸ハを機會ハ遭ハむも、望なきに非ず、故に苟も立身出世れ目的を達せむと欲するものと、健康の心掛ハを肝要なれ、これ豈吾一身に於て必要あるのみならず、將來子孫の爲にも必要なり、凡そ穀物改良の要は、種を撰びれが培養を勤むるハあり、先つ良撰の種を蒔き、能く之を培養それは、先年れ種より良き種を得るハ、當然にして之を醫學に徵するに、彼の遺傳性と稱する風發狂、結核質等も其發病者の子孫能く注意し、凡そ三四代を經過して無事あれば、先天の痕跡なきに至ると云ふ、されば、柔弱なるものゝ子孫壯强とあり、壯者の子孫柔弱となるも、三四代の歲月を要し、事甚だ緩慢あるが如くなれども、その漸進漸退れ事實と爭ふべからず、亦形体と精神との關係に於ても、醫學上天壽を全ふするは、唯攝生の一法にあるのみとハ、ろの敎義なれども、病理上に於て形体と精神と、果して如何なる關係を結び、如何なる影響を有するかハ、未ざ精密なる證を得ず、雖然事の實際に於ては、兩者の間に密接の關係あると、明々白々にして、例令は軍隊の戰時と平時と比較すれば、戰爭中衣食住の不完全と勿論、病症の手當も事不充分にして、固より平素の如くなるを得ず、且つ不攝生のみを犯すとかあれども、ろれ身体の健全常に倍して、病者れ數も割合に少なといふ、航海者が眠食を常ハせず、鐘山業者が晝夜坑內

ゐ働くが如き世の常なれども、特に害あるを聞かず、これいづれも精神の張るが爲に、形体を維持するものにして、双方直接の關係を見るべき、之に反して我愛子を失ひし源因より、以て鬱々悞まず、遂に病に陷るが如き、又老人が死に瀕して、子の遠方より來るを待ち、不思議にも生を持續したる病者が、子の歸りさるを聞き、一目一言れ訣別を以て逝く等の事實い、畢竟するゐ人の希望と失ひ、張詰たる精神乃弛むが爲、形体ゐ變化を生ずるもの也。

然らは彼れ紅塵萬丈不潔不健康の都會に住する人民か、如何かに能く病を免れ、如何に能く生命を保つやの理由を發見するに難からず、故ゐ身体虛弱なるとたは、將來の志想目的事業等に關係を及ぼす事も、又明也、本年五十一歳の高齡を以て、世界の周航を企てたる彼のジョミユアスローカムれ如き、邦人なれば徐々隱居の仕度に取りかゝるべ兒齡を以て、單身小艇を操り、世界周航を企つるが如き、その大膽むきの人をして敬意を起さしむ、彼の西洋に於てい、身体發育の完全なるものゝ寫眞を、時々新聞に掲載して、世に公示すと聞く、かく不撓の精神と、剛强敏活れ身体等を有して、始めて文明の潮流に游泳し、乃の實を擧るとを得べし、況んや先年以來、世界の表面に名を揚げたる我邦國威の發揚は、諸君學生の双肩に懸るに於てをや。

乞ふ學生、生徒諸君武道と克勵實修して、人の天分、國民の大義を盡すに、こ乃体練とこれ心練とを得らるゝ方法を勸めふれよ、これ今日余の老婆卑見一片を陳して、諸君の反省を促がせし所以也。乞ふ之を諒せよ、

右之一篇い、岩崎柔道教師ゞ、武藝大會當日なされむとして玉ひし演說の梗概也、惜乎當日は時間切迫の爲、吾等は教師の演說を聞くを得ざりき、しかも幸なるゐ教師の筐底その草稿の蟄まるあるを聞く、余を强ひて其稿を拜閲せむとを乞ふ、教師莞爾稿を余に示して曰く、子れ体至つて不健、留意注心する所あれ、と、余唯々稿を戴兒て歸り、飜讀再三大に得る所あり、由りて更に教師に迫り、會誌に投じ同學に示さむとを求む、教師こんなもれでは、と許す所あらず、余更に强もると數度、辛く教師の諾を得て、會誌に投ず、意以て同學の反省を乞ふにあり、その文辭に至つては、教師れ負ふ所にあらず、全体糟粕の責い余にありて、熱誠恩洽の賞ハ教師ゐ呈せざるべからず、附記以て聊ゐ辨ずる所あり矣。

藤馬卿記

京都往復紀行

養愚子

○伴侶欲しや

二月三日、四時前に目覺めたれば直ちに起き出て旅裝を整ふ、同ド寢室の友夢温かに眠れば起さず、四時二十分唯一人マイナス爺が、それでも今日は結搆な降りまゐぬワイと云へるに、心安く覺へ足並も勇ましく、闇夜を破りて駈け出す、松任を夜の間に過ぎぬ、手取川の長橋に片足踏みゐけて時計を案ずれば八時半なり、崇高なる白山と直對面の心地、朝ゐれバ特に壯快、寺井にて朝餉したゝめむと思ふものゐふ、九時なきでゐほ店を張らず、叩き起さむも面倒なれバ、其儘過ぎて小松

に着く、朝食前に一休もせず八里を歩みたれば、今は早や腹中無一物、眼ハ凹み、脚は蹌踉、昨夏お粥腹にて立山を降りたるよりも哀れさまあり、三角茶屋に飛び込みて、充分に腹膨らせ、十一時半に出で立ば、此處までは我面前に見ゆる人間、何をも何時のほどゝか背向々たれど、不思儀や食後三人に追ひ越されぬ、將た此處までも何物も眼に入ずず、心にも懸ずざりきに、樣々の事眼に留まり、伴侶欲しやと思ふゝ至りぬ、さてハ我脚も疲れにけりと情なし。

神遊觀に往年れ壯遊を繰り返きつゝ、大聖寺も過ぎぬれば、一方に割據きたる「朋友」ハ頓に勢を增きて、胸腔の全部を占領しつ

我にして常に順境に處し、爲さむと欲して爲し能はざることあく、行はむと欲して行ふ能はざるゝとなくむば、我何の要する所ありてか朋友を求めむ、而かも我は時ありての逆境に陷り、爲さむと欲して爲す能はず、行ハむと欲して行ふゝと能はざるあるを如何せむ、我脚ハ以て御嶽山巔れ風雲に乘ずるに足ず、以て立山地獄れ瘴霧を蹶るに足る、而かも又一里に足らぬ小坂の上下に苦み、日なほ高ふして宿を急がざるべからざるを如何せむ、同じく熊坂峠の茶亭に憩ひしも愉快れ男なりきよく談じよく笑ひ、愛嬌余りありて世辭に巧みあり、予窺に思ふらく、若し彼が騏尾に附するを得ば千里の道も何不遠きを憂えむやと、而して彼又予を以て與に語るに足るとなし、相約するゝ丸岡まで同行もべきを以てす、乃ち欣然と きて談笑するもの里許、彼急に顧て曰く、俄ゝ用事を案出したれば失禮ながら先きに參るべしと、予呆然言はむと欲して未だ其言を得ず、彼が影は既に十數間の先きにあり、車夫之を見、巧言令色予に追從して來りて、乘車を勸むること切、ゝ同行を約する

れ伴侶と我の疲勞したるを見て、予を見棄てぬ、見棄つる者智か、見棄てふる者愚か、而して車夫れ親切氣あるゝ、予を救はむが爲か、將た予を陷れむが爲か。

予は甘んて我脚を引きづるべし、予は痛き脚を引きづるに慣れたり、車ゝと乘るべからず、叱咤一番車夫を斥くれば、嘻々冷笑次で惡口聲を聞く。

あゝ世路亦此の如きかな、斯る場合に懷しき親友のあらばと、坐ろ忍ばれて四時五十分と云ふに、牛の谷の富本屋に投ず、辛うして十五里を歩みつるも初日おれば。

○奇遇とや云ハむ

獨り炬燵にあたりて日記を認むる折りかふ、合客一人入り込む、金澤の人村田某、煙草賣捌を爲さむ爲か、京都の村井、大坂の殿井に用事あれば、其を幸に大葬式拜觀にまかるとなり、突然京都に赴きたりとて、空たる宿所のあるべくもあらねば、大津にや通とむ、大坂にや上ふむ、或ハ伏見の方却てよろしきかあど、懸念顏に物語る、歸省もる予と左る氣がのりもなければ、晏如たり、食後湯に入る、門前の人語は新客の入來と思はる。

浴して了りて室に歸れば、主婦來りて云ふ、今れ出なされた書生さんと阿方乃御存知の御方ださうです、どうか御一緒に願ひます、と言未だ終らず、さてと誰か追來せるよと可笑しく思へど、事意外に出で其誰ゝして、如何にして予の此家ゝ宿せると知れりや疑ハしければ、故らに御存知とハ如何にして御存知なりや、予は御存知なるやあらぬや知ずと云へば、けたゝましく下婢を呼びて、れ前ハ此御方の御存知の方と云ふたぢやないの、御存知ぢやないと云ハきやるのと云ふ、下婢は眼鏡を

あけて母指をくゝぼた書生さんと、わしの伴侶に間違なしと云とれなしたと答ふ、兎ゐ角ゐ名を聞ひて來とと云へば、やがて浴室より歸りて、阿部さんと申しまずと申す、思ひきや天心、無操兄弟ゐりしゐり。

二人交る〳〵語るを聞くゐ。

昨夜君予ゐ暫しの別れ言云ひて寢ゐ就き給へる時、予も心れ内ちにと同行せむと期したるも人ゐ漏さず、點撿濟みて無操ゐ告ぐれば、左れば予も行かむと同意せり、夢驚ろさむも流石ゐれば、朝とくこそと其儘臥しぬ、さて六時前に目覺めて君を呼ぶに答なし、階下にもやと走せ下れば、マイナス爺君を送りて一眠りしぬと云ふ、南無三後れたりと俄ゐ騷ぎて、六時半に走せ出す、松任にて朝飯ゐ、粟生の假りの渡しの渡守に二時間斗り前さに君過ぎぬと聞く、小松れ三角茶屋にても二時間ほど前と云ふ、大聖寺ゐて日暮をぬ、兎てもれ事、夜行して福井に至り、君より先きゐ京に入ゐ、一泡ふかし吳れむと、追ひ付けぬ氣落まぎれゐ、野心を漲らせ、提灯、蠟燭、又腹の料にとて餅とも求めて、踏み出したる勇氣と、天晴なれども、熊坂れ泥濘に疲れたる脚をはたかれ、牛れ谷に着きていや一歩も進まず、殘念ながら遂ゐ此家を叩けば、妙に君も宿り居るやの感ゐり、眼鏡かゝさる書生は泊まふずやと問ふに、母指くゝりたる書生の泊まれりと答ふ、占先たりと嬉しく、飛び立つ思を忍びて、此處ゐと云ふ隣りの室より窺へば、何事ぞ禿げ頭れ老爺のみゐり、いぶりるぢちに又襖の開きて君の入りたるさまなれば、おもしろしと心にたくゝながら、湯ゐ浴びたるに、下婢乃要らぬ告げ口にて、計略の總てばれさる果敢ゐさ、されば此處にて逢いむとは、願ふ所とは云ゐ思ひかけざりし。

寒稽古乃名殘りを母指ゐ留めたるか、早くも人相の一つゐ數へらる、さても恐ろし世の中や。

村田翁が嘗て箱根温泉にて、餘儀ゐく合宿をなし、三人の拘賊ゐ狙はれ、却て之を飜弄して東京まで同道せしめし懷古談に、旅路の心得、數々教へられ、夜更けぬれば眠る。

○未來の大臣

四日、軒端の殘んの雪に、あか〳〵とさす日影ゐ勇ゑ、七時半出足す、まだ十町も進まぬに、空摸樣變りて、雪ちふ〳〵、降りまさり、風加はり、水雪とゐり、雨とゐり又雪とゐる、率い飛ばむとし、手と凉る、外套は濡ひて下着ゐ及び、寒れとと立山れ氷原に震ひさるに劣らず、去年三高れ友、三星、藤崎兩生と、偶然の邂逅ゐ背なる莫座を敷きて旅路を忘れさる、予をゐと古跡も、唯此處と斗りに過ぎて、青山白水と親まむ由なし、雨雪を防ぐゐ急にして、物語ふむ餘裕なく、途中一度暖まりたるのみ、嘗て行軍の時、あまりの汚穢さに、夜半より逃げ出したる丸岡とも早々ゐ過ぎて、森田に至れば、九頭龍川ゐ架したる鐵橋は、九頭龍の横いるが如く、今や美事に成就せり、此橋の此處ゐ莫座被ひて憩へる時、福井連中の車を飛ばせて來れることもありけりと、獨り微笑む、福井の停車場前に一時過ぎ着く、新開なれば町も未だ町れ体をゐさず、雪中ゐさまよひ漸くにして晝食し、停車場に至る、下等待合は夏ならばよのふめ、寒さも強き嚴冬ゐ風の往來自由ゐる土間ゐれば、身は忽ち冷へて氷の如し、上中等待合は板間にて、暖爐さへ備へあれば近寄りて温まる、從僕つれたる一肥大漢のさも暖かげなる外套被りたるが、顎鬚長く眼鏡かけたる痩弱男と物語るゐり、痩せたるい何者

ぞ、天機伺に東京にまかると云ふ、其威張り加減察すべし、忽ち一驛吏あり、嚴然しき顏して入り來り、あたり睥睨して曰く此處は中等待合ぞ、下等の者ゝ出づ可き〳〵と、去るもの二三、彼れ村田翁が脚絆草鞋の旅裝を見、迫て曰く、お前は中等かと、翁然りと應ふ、曰く中等なら草鞋を脫いで貰はねばあらむ、ろんな土足で汚しちやなふぬ、此處でゝ中等ハ車中ゞ湯壺があつて待合に暖爐ある斗りぢや、下等の者まで此處ゞ入られては、中等の甲斐がなくなるとつぶやきながふ、爐邊れ人數を一二三と算して九ゝ至り、中等に乘る客の都合で列車を付けるのぢやふ、よし中等が九人、なぞ罵りてもさまゝ〳〵ぬ樣あり、村田翁は一二言葉を濁して出で去る、予等又草鞋を穿ち破れ外套を被れども、それとさしてお叱りを蒙ふず、況んや田舍紳士れ痩せ男をや、吏去る、紳士脫帽慇懃肥漢に告げて曰く、私ハ安いろで行きまするから、此で失禮致しますと云ひ終て去る、而して予等あほ知らぬ顏あり、吏二三又來り睨むこと前よりも恐ろし、忽ち無操の一足暖爐に觸るゝを見、叱して曰く、汚ない、此處は掃除をる處ぢや、汚して貰つちや困ると、頗る予等の去ふざるを憤るもれゝ如し、天心激して曰く、何だ喧まゝい、此寒いに貧書生をあさふしたつてよいぢやあいかと、傍の肥漢徐に煙草をふき溫然微笑して曰く、君等ハ未來の大臣ぢや、ナニ搆う事ない、ほさるがよい〳〵と、予等洪然大笑、驛吏苦笑して去る。

鳥なき里の蝙蝠、我れ其の大威張なるを知る、小停車場の驛吏傲慢なる惡むべきかな、我を以て自ふ規則を犯しながら猥りに他を尤むと咎むるなこれ、我は未ざ切劵を求めざるもれ、其責なるや赤なるや知るべからざるなり。

三時五十三分滊車發す、夜に近づくゞ從ひ寒さこと無双なり、柳ケ瀨の邊隧道多く入ること見れば出で、出たるかと思へば又入る、長濱を過ぎて雪減ずたりと云ふものあれども寒冷の度は益々酷、睡たきを忍びて睡らず、九時前米原に着、乘代の列車はおくて次ぎハ明朝二時發と云ふに、已むを得ず井筒屋に宿る。

○親戚の情話

五日、四時四十七分覺めやらぬ夢を載せて米原を發車す、ほの〳〵明け渡る地上は何處も眞白あり、夜の間にれたく降りたりと見も、玻璃窓は內より凍ぎて模糊をあ〳〵、屢々拭へど又凍る、琵湖れ眺めハ慣れたる目にもれも玄ろく、比叡比良の嶺々故人れ我を迎ふるが如し、七時廿分京都につく、同ド停車場なもとも常よりも騷がをく、同ド騷ぎなれども常にも似ず悲しげなり。

天晴を地凍る京都れ市、家每に用水桶を備へ、町每に自身番を設く所々兵士の立番せるを見る、御苑內に入りて先づ驚かるゝハ掃除の行屆きたることあり、數多れ植木と一々ゞり込まれて。大宮御所の周圍、警戒特に嚴しく、憲兵巡査の巡回引れも切らず。

九時我家ゞ着々、突然の歸宅ゞ家內を驚ゞせたるも暫し、やがて一堂ゞ會して物語る、綿々たる情話、盡くるが如く盡きざるが如く、其樂や其中に在り。

○大葬式拜觀

七日、午後六時半、三條通御幸町にて拜觀す、通御ゞ二時間半を費ぞ、此日雪ちらつく。

十日、泉涌寺に詣づ。

○木村長門守

十一日、大坂ゑ赴き中の島公園を過ぐ、一大石碑立つ、題して云ふ、木村長門守表忠碑。

昨夏予義兄ゑ導かれて河内の國若江村ゐ木村長門守の英靈を吊ふ、疎松枯るゝ處木柵朽ち、柵内の一墓石稜角悉く削らる、義兄曰く是れ此地方の人の爲す所と、予何の意たるを解せず、且つ深く之を怪しむ、義兄笑つて曰く怒るを止めと、其之を削るは之を壞たむが爲めに在らず、之を崇敬するが爲めなり、彼黨傳へ信ずふく、若し長門守が墓石の一片を得て、之を守囊に收むるあらば、勝敗れ機必ずや他を壓倒するを得べきと、是れ此の事ある所以ゐ〜て其迷信憐むべきも、長門守が精忠勁節能く駕蕘に徹する所以にあふゐや、西村捨三氏嘗て此處を過ぎて、此墓石の寒煙荒草に委せるを見、慨然と去て改設の意あり、從來奔走事略成るも、當村の人民、道路開拓に平あらず、以て未だ地下の英靈を〜て莞爾たふしむるに至らず〜と、偶々義兄の家ゐ小説「兜の譽」あり、消閑一讀、益々長門守が至誠に感ず。

更に一話あり。

黑田侯等豐太閤乃墳墓空〜く阿彌陀峰頭に委棄せらるを慨き、爲めゑ一大碑を設立せむとするや、周旋巧妙なる西村翁と招き、之を依托す、翁憤然と〜て曰く、嗚呼太閤の功勳大や卽ち大なり、而かも兒童走卒も之を知らざるゝなし、碑を建ゆるハ之を知ふし究むが爲めなり、既に天下萬人に知ふる、假令阿彌陀峰にして蒼海たふむも、太閤の盛名は青史と共ゑ朽つるあけむ、我れ此擧を以て無用となすにあふずと云ゑども、古今人乃彰はさゞる可かふず〜て未だ表はれざるもの、夫れ此擧に先んじて而〜て表ゑさゝるべゝふざるにあふずやと、袂を拂ふて去る。

後東都に團洲乃一座、木村長門守を演ず、西村翁乃ち招待狀を發して、黑田侯を始め先きの發起人の家族を劇場ゑ迎ふ、伎正に酣、佳人泣き淑女泣ち遂ゐ堂々さる有髯六尺の男子輩泣く、伎終り翁一場の演說をゐして曰く、我が先きに俄ゐ豐太閤の建碑に賛せず〜て、而〜て天下大ゑ表ゑを可く〜て表ハれざる者ありと云へるもれ、忠臣本村重成の如き其一人なりと、語々肺肝ゑ徹す、聞くも感動、言下翁の企圖を賛せりと云ふ。

今や將さゐ阿彌陀峰頭松籟颯々たる處、一大石碑を見むとす、知らず若江村人影稀なる處、稜角なき墓石ハ如何、其之を若江村に於てせずして中の島ゑ設けたるハ如何。

○「今後感」

十三日、午前四時半膝下を辭して歸校れ途に上る、七條停車場ゑて天心無操に會す、五時五十分發の第一列車は當分運轉せず、空〜く待ちて七時五十八分に至る、乘車直ちに「春花秋月」を繙く、窓外の景と眼に之を見ず、窓内の語と耳に之を聞ゐず、「遠征」「記獨嘯庵」など面白く讀みたれども、最も愉快を覺ゑたるは羯南居士れ「今昔感」なり、居士今ハ日本新聞主筆を以て、其名海内ゑ震ひ、一たび管城子を叱すれバ天下れ輿論を左右するに足る、食ふに魚あり、出づるに車あり、瀛車は卽ち上等ゑ眠る、而〜て其嘗て青崖、日南、拓川あどゝ同窓ゐ學びたる當時の棚卸を爲〜て曰く、白シヤツ背に赤インキを以て忠肝義膽と記〜岳武穆を氣取りたると青崖なり、膺筆を以て商賣にせよと評せらるゝ迄に、藤田東湖の書を學びたるハ日南なり、洒々落々最小品文ゐ長ド、自ら支那風の

才子を以て任ずたるは拓川あり、而して居士は四人中の最駿なるもの、運動場の草藪より蝦を捕まへ來り、夏帽子ゑ入れてテーブルの下ゑ飼ひたるは、履歷上ゑ特書すべき事ありと、其他我所謂根賀的旅行をなしさる如き、大ゑ予が同情を引かずむばあらず、居士は卽ち「今昔感」と云ふ、予い之を讀みて「今後感」に堪へざるなり。

滊車米原ゑ着し、漠々無涯の空想之が爲めゑ破らる、便利ある滊車も時に不便利極まることあり、又々此處ゑ二時間待たさる、待合ゑ上下の區別なく、暖爐もなければ隅に縮まりて、冷たき握飯に身を震いそ、十二時過ぎ發す、此の如くば京都の第三番列車に乘るべよりりしあり、駛り走りて敦賀を過ぐ、先きにゑ夜にて少しも氣付かざりしも、見れば目も覺むる絶景の場所に來れり、冬ながらも蒼翠滴るが如き連山に繞まれ、波平にして鏡の如き敦賀灣內、水島、冠岩など點布し、立石崎を出でゝと水天髣髴たる風光を、遙かに瞰望そ、快哉を叫ばざらむと欲するも能ハず、北陸線にも此風景あり、以て車中の鬱を散ずるゑ足らむ、唯近く小丘多く、屢々眼眸を遮つて物足らぬ心地さるるハ殘念あれども、其此あるが爲めに却て風景を買被りするやも知れず、若し予にありては、更ゑ他ゑ一の愉快を感せしむるものあり、卽ち眼下の大良より敦賀に至る新道は、嘗て有恒子と共ゑ野宿の翌日、人間の脚と此の如く疲勞しても猶歩けば歩けるものなりと大悟ゑし所たる處あれハゑ、此に至り予も遂に今度ハ「今昔感」を唱はざるべからず。

午後五時福井に着く、直ちに線路を傳ひて丸岡ゑ向ふ、雪路滑りて歩み惡けれども、固まり居れハあか〳〵よし、やがて月出で彌望千里とも評す可く、皚々さる濶野、大陸的景色ハ貉兎を飽食し、夜に入て鶴來より歸るの壯遊を想はしむ、積雪は北そるに從ひ增しゑれども、丸岡迄ハ尺强のみ、八時頃中野屋に投宿。

○一日に十九里

十四日、是非とも本日中に歸澤せむと思へハ、五時頃ゑ起所下婢ども起せども起所ず、七時廿分漸くにして出發するを得たり、朝來の足力强く、可憐なる紳士が橇ゑ載りて、所々轉覆せるを追ひ越し、雪を蹶立てゝ進む、十一時半に大聖寺を過ぎ、四時頃小松ゑて食事す、手取橋畔ゑて六時あり、松任にて蕎麥を食ふ、此日和煦清朗、草鞋雪を踏めども心は駘蕩三月の天に徘徊するが如し、夜に至り風あけれども寒氣烈し、偶々童謠を聞く。

「書生さん○○は買ひたい錢はなし云々」とあゝ聽くゑ忍びむや此の童謠、之を維新後の「書生書生と輕蔑するな、今の太政官は皆書生」と云へるの豪壯雄偉にて、霸氣稜々人ゑ迫り、天地を呑吐するの概あるゑ比すれハ夫れ果して如何ぞや、偷安姑息、冬ハ唯暖かあらむことを求所、夏ハ卽ち涼ゑからむゑとを希ひ、食と只管美味を欲し、衣は特更ゑ流行を追ふ、肉あれども黴を生ぜ、骨あれども朽ち、心は既に狐狸の食餌とある、書生の意氣の衰へたる何ぞ甚だしきや、自重心なく克己心なく、徒に閑居そて不善をあす、此の如き書生を有する我國の前途は如何、天ゑ口あし人をそて云ハしむ、童謠い夫れ天の言か、須らく警鐘を亂打すべそ。

松任より脚力大に衰へたれども、なほ幾分の餘裕を殘して校門前に着けい、公會堂の鐘聲正に十一點、算し來れハ十九里を十六時間弱にて歩みたるなり、時習寮に入れハ夜更かそ連中のそありて

他は既に臥しぬ、寢室の友と何れも睡り居れい起さずいさをい此の京都行い同室員が睡中の一夢あり〻り。

（完）

文　苑

ちりはてゝる梅か枝よつけて友のもとに

草野吹雪

かくも都にうとき川つゝの里にしあれと棹姫の心にはうとかゝぬにや春の光にもれすうら〳〵とこち吹につれて門の紅梅さ庭の白梅さてハまと近ゐのまて殘りなう咲そろひつれは數あゝぬ賤か伏屋も何となう艶立ちつかかるをりにころはと門の芥も拂ひふるひたり一むしろをも清めて待ちつけぬれと生の松原いゐたりやともきこえ給はぬつれあさけゐそれも理也いとひくき梅の立枝立のほる川れ霞にとちこ光らをて香たゝもれぬなゝ光やかてちりかゝになりぬれい下行水れ末うをるこそこよなき使なゝめとおもへとかひなし朝なさな音つるる鶯れ外よあきはあはれ心みえなり

たのみつる君かこゝろも此花もちりてさひ玄ゐ賤か伏やか

花廼屋吹雪

柳臨池水　打おひくやなきの糸と池のおもの水ゝも春の風をみおけり

大原女小川をゐさるかたに

折ろへしま柴のうゐの花やちる渡瀬ひさ〜く庭もにほへり

藤房卿　岩くゝの峰れ一ら雲分入をてみちなゐ奥におとかくれけん

征清軍忠死者の靈祭によみて手向ける

櫻花それもおよはしちりて猶はておくかをる君かはさをに

歸雁遙　文をたゝことつてまーをかり金のつゝを爲たつる春霞かな

古砌菫　主なき古きみきりの花すゝれこてぬはけふもゝつねきに鳧

花　筐

松下文樵人

春寒　築山ゝけの水こほゐ浪もなゐさに角くみ一
あしの若葉よ泡雪のふる年よりも猶をむし

春霞　松をハつ木に棹姫か霞れ衣をかけわゝす
み山路たとるゝ誰な覽我をも人は左祉見め

春露　靜けきゐきれ朝風にやおきのいとれ白露れ
玉ゆら長き日を受てこかねの色にひゝる也

春風　朝戸いてつゝ若草の燃る門邊のいさゝ井を
汲手も今ハ寒ゝらて梅か香おらぬ風そなき

春海　緑と同じそふやみつ水やそらとも白たへれ
　　ま帆豊おるうな原よ雲のうすそそか淡路島
春川　霞を出て宮ら〳〵と梅か香なかふゆく水に
　　浮ふはは岡か水泡か末はかすみに隠れつゝ

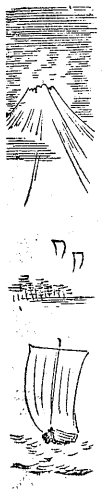
代悲白頭翁を譯を

福井櫻園

みやこの春の八重さくら
　ゆきと散りに去あとも無去
はなのみやこの處女ふは
　かざしの花れ散るかへに
我も何時去りこくざまよ
　なりや果てむとなげくなり
今年のはあの散まぬれば
　我も去年よまおとろ色つ
また來むと去の花ざかり
　あひ見むとはいのちなり
常盤の松も折れぬれば
　たれゝとなりて燃ねばくゝ
新桑生ふるあふ小田も
　かハれば海となるものを
今あるひとも目の前の
　いなと散りてや失せなまゝ
年々咲ける花るとあと
　むかゝも今ものはらねど
花見る人はとゝ〳〵に
　かハり行くころはかなけれ

やよ宮ふ若さをのおふよ
　あとをと見ずや我さまを
今いかゝらよしろさへの
　雪いだゝゝどいわ去へは
くれなゐ匂ふのむばせに
　樂しく世をぞすごゑてし
ろしこれ雲のうへびとれ
　春のうたげにとむべりて
散るやさくふの木れ下に
　立ちてかへしゝ舞のそで
池のみぎいのうてなには
　錦れとばりさてつらね
久しき世々のためしをば
　高殿のうへにゑがれたる
たかくたふときうま人と
　袖をつふねゝ我あれを

老れやまひをなぐさむる
　人もあき身とれところへて
むのしの春れさのしみも
　忘まを果てぬれ今ころは
やなぎの眉れうるはしれ
　時いいつまでたもつべれ
やがて白髪よ生ひうはり
　ひさひに老のあみぞよる
世をうつせみの人のみか
　舞ひてうたひて遊びてし
其ふるさともいま見れと
　打つやつゞみの音絶ねて
さそがれ告ぐるとりの聲
　悲しげにれみ鳴くものと



しのぶ草

やれる我れ

やれたる家に身をよせて　まづしきはに暮しつゝ
憂き日と送るさびのろふ　やまひよ臥しゝ悲しさい

月ひやゝかにかせさむく　雪さへ霏々とふれすさび
ねざめ勝なるねやのうち　あれはきくや浪乃おと

谷間といでしうぐひすの　なく音のどかに春たちて
梅さく頃とありぬをど　我いたつきはおこたらで

己がやまひのいえむには　つれなれおゝを去もせむ
鬼のすみうを出でむにも　貧しきたいをいるにせむ

春さめさむく更くる夜半　やそきともし火搔さてゝ
なさけにこもる家書讀ば　言なくそれにあみだあり

ふかき思ひを忍ぶ草　れく露の身のはのなれわれよ
やめる躰軀れやせはてゝ　さそふ嵐おたえむとすふむ

ゐれたる庭の梅の花　淋しくつぼむあはれの姿
のどけき風に疎まれて　ひらかで汝い凋みてもくう

細くかゝみしその枝ハ　朝日に匂ふ香もゐらずして
きなく鶯あふなくに　幹もろ共に枯れとつらんゝ

いたつきの身の昨日けふ　精神つかれて理想におやみ
春まださむきやを窓ゐ　それはをびえき梅花を愛そ

俳句

有は斜白帆遠沙干哉　長風
海士の家や夕日斜ゝ揚雲雀
半の子が轉つて居る日永哉

大寺や緋鯉飼ふさる春の水　こだま
書ゝ倦て野邊ゝ出づべく日と永さ
春の田に跳り込さる荷馬哉　一望
森の灯の水ゝ映りて朧あり

朧夜や湖越もる三井の鐘　拜領の春雨丸よ香を點ず
春の水足弱つれて渡りけり　球江　花に醉ふて杜甫李白の別哉
春風や水色山光樓三層　修竹生
春の家五歩に水あり十歩に山　火四季
大佛ハ首バかりあり花の上　清泉　氣車道に火せまりたる燒野哉
畑打に田舍力士乃変りけり　蚊遣火ゐ匂ひとりて小兒の泣出〜ぬ
霞けり松ねぢけさる岩の上　賊伴つて廣野ゐ火せ〜野分哉
日曜を春の嵯峨野よ遊びけり　修竹　主從の集めて火せし落葉哉

遊不言溪記

村上函峯

余客冬十二月。來薇山遊于朗廬阪先生之門。春來無聊。如有病之人。一日友人植松春人勸余曰。不言溪之桃花方盛。宜俱一遊也。余蹶然起與春人共出門。天宇牢晴。四山如笑。余已覺心中幽鬱。渙然冰釋焉。取途井原市。買村醪野肴。行數十步。至芳水橋。則西岸皆花。一望爛然。不知幾百株矣。紅雲縹緲。掩映于青嶂翠巒。漸進漸近。則花光眩目。燦如錦繡。麥苗菜花。又繚繞其下。狂飈忽至。飛英千點。飄揚空際。奇觀不可狀者。則袁簡齋之放達而新奇也。余曰然。是蓋地之與花相得。而爲此觀也。余在都會數觀花。大抵黃塵萬丈。乏天然之風致。譬猶李王諸家。及徂徠南郭之詩。摸擬潤飾。往々失眞氣。不若此溪之花。兼有明末清初諸家之腹也。宜哉古人不取名都大邑之花也。春人稱善。於是傾杯無算。少頃日沒于西山。遠寺鐘聲落于花間。乃收杯盤。醉脚蹣跚歸學舍。快然援筆。記于西窓春月之下。

題夏禹治水圖

浦井信

史稱。唐堯之時。洪水方割。下民昏墊。於是。禹奉命。疏江決河。所活千八百國云。嗚嗟盛哉。當時工藝之術未開。而其成功如斯。蓋至誠之所致。得所無事而行之。堯舜精一之敎然也。後世稱爲大聖亦宜矣。我邦近時。鴻水荐臻。至客歲。則近畿北陸。到處莫匪汎濫。然比之禹時。蓋不過萬之一耳。方今工藝之精。稱闡造化之秘奧。無復餘蘊。然其成否相反者。徒利用奇模新式。而由無精一之敎。以養至誠之心也。曩者官聘歐洲學士某。使治澱河。隨修隨決。竟無奏功。或詰之。某曰。予之所施爲。無一不合理者。而猶如此。無他。貴國河水之不合理而已。衆爲呆然。世之凡庸。株守專攻之術者皆然。況以治水爲奇貨。詭僞百出謀營私利者。何遑問至誠之有無哉。某子賀州某邑人。家枕手取川。客歲河決。水浸家屋。今脩其書齋。名曰小黃樓。蓋取蘇氏所謂土實勝水之義也。頃日使畫匠某作夏禹治水圖。徵予題言。抑予之不文。較之蘇氏。固有聖凡之差。而敢題一言於圖後者。有所深感也。

映雪樓記

垂東仙史

一日倩童子遊山中。一丘下有墅建焉。圭竇桑樞。蕭然遙棲。墅有竹籬。劃其中。髯松從籬外蔽衡門。門扁曰映雪樓。乃顧童子問曰。是何人居。童子曰。主人稱景孫。高陰之隱士也。墅後仄逕。自東向西。有泉流於其南。澄洌可鑑。樓距丘不滿百武。檜烟樅嵐。紛々撲軒而飛。蓋於觀雪爲宜矣。樓東則平疇千頃。翠樾清渠。亭觀村舍。點綴於其間。亦以爲佳矚矣。予促章子曰。幽清之地。不可久住。乃降山。既而勁風捲雲。天地晦迷。驚起則是爲莊叟之胡蝶矣。於是乎以爲予放肆懈怠。忼慨度日不知悔。是烏知非天之假夢以激勵吾之志者哉。史云周公璀年廿四經略中原。諸葛武侯廿七定三分之策。乃忸怩久之。既而亦以爲。衛武公九十作抑戒。蘧伯玉行年六十。而六十化。夫駑馬十駕。可以致千里。自疆不息。庶幾手足窺聖賢之門牆也歟。居數日。鄉友蕙堂君遠來叩予寓。寒暄叙訖。乃語曰。僕昨臘買地于高山之陰。建墅以爲靜養之地。子爲僕記之。乃似所袖丘園圖數副。予攤而閱之。自其丘壑林樾泉石之配置。至蓋瓦級甎軒楹之細緻。僾然先所夢見者。因驚呀語以往事。蕙堂啞然笑曰。彼童子者。無乃代僕爲之先客耶。子其休怪。余乃應曰。嗚呼蕙堂當日麗風柔之時。登斯棲寥簾以望焉。則彩霞軒舉。山水明媚。紅熏綠暉。溫々足以養君子之風度矣。若夫當飛白繽紛。空林枯木一朝而華之時。則天地皜素無纖埃。瀟洒足以涵清廉之韻懷矣。當此時徐想見古孫康映雪之苦學。而益勤而不止。其所造詣未可量也。語曰。高人多感慨。夫胸次高。則眼空一世。遺于今者。必感於古。感則興。興則勤。勤則成。子其勉旃。然吾以未見其樓爲嘆。乃將欲省鄉之日。訪子於此樓驗其所夢見果允否。

遊長命寺三首

冷骨

鴻落雲漠々。渺々琶湖天。鬱蒼長命寺。樓臺木未分。扁舟曉來訪。風急吹水雲。雲來失天地。雲去看崇巔。一塔嵌翠微。天上捿金仙。素鶴亂翔處。鐘聲度空淵。

古樹積翠濃。讓露滴如雨。磴道百折盤。兩袖風吹舉。豁然妙境開。天低護靈宇。庭清不見砂。簷角珍禽語。一契妙明心。倚門久延佇。

一徑寺後得。去攀最高嶺。疎松倚怪巖。長飈衣袂冷。脚下怒雷殷。頗怕浪濤猛。浮雲如飛鳥。參差水上影。口噓長虹氣。胸呑三萬頃。造化幸詩人。信美媚烟景。徑欲御飛龍。一閱了清境。

梅花

松心子

疑是天上星。落來綴瑤林。髣髴月中見。依稀雪裏尋。曾無蜂蝶褻。時聞翠羽音。風暖香脈々。境幽色沈々。所賴陽和早。寧辭荊棘深。嫣然一微笑。此裏看天心。

春夜

亂擲案頭書幾篇。無光燈火瘦吟肩。愁懷中結非因夢。我分自知休問天。無賴陰晴春二月。難忘離別路三千。梅花時節寒如此。獨夜芸窓聽雨眠。

批評

本誌十四號一瞥

磧川郎

九龍二夜黑雲を捲て北辰れ野よ天降り、吐き出と紅の餞に萌え出つる春れ草葉の下蔭と照してより、雨夜の月旦つぎ〳〵よ榮え〳〵て、太液子に傳へわれに及ひぬ、さても炎々たる熱血と皎皎さる精氣とを注いて、本欄の特色を霍揮すへきい、吾等會員たるものか文壇に貢献すべ化れ義務なるとし、開山九龍齋の君れ殘〳〵置ゐれ〳〵言の葉もあれは、早くより此事企てゝ、詩神の聖壇ならぬ我文壇に、一枝の花を捧けもやと思ハぬ折〳〵なのりしゝど、元より搔撫牛の吾等ゲ分際よい、及びをつかぬ難き業に〳〵あれバ、我非才を耻ぢるの餘り、臆病風の吹き荒むに任せて、水莖の穗先も凍り勝ちに、河鳴鳥のうか〳〵と其日〳〵を送り暮しつ、思ハぬ罪を作ま了んぬ、さもれ、此儘に過をんい後世恐ろし、されはとて人並勝れてか弱化我痩腕見られん事のはとも口惜けれど、此上の罪を重ねんには勝るべ〳〵と、袂ふ〳〵める梅れ下露を兆ふて、とぢけ心のやう〳〵よ解々初めたる今日此頃、夫れ男か今茲に晒す生耻を、同學れ秀才如何で沽い給はんや。

さても、葛西因是か雨夜れ品定を評す、森田節齋か淨瑠璃本の妙處を指摘〳〵たるゝ如化、あるは、幕末の文壇よい、味噌摺とかや諷刺めきたる批評のありと〳〵礫川の翁はいへど、今ゐ所謂批評にハ非らさるべ〳〵と覺もれハ、先つは我國には昔より批評てふものなゝり去といふも、敢て過には非ふさるべし、されは、今の批評ふ指と染むるれ士、あるは支那講文れ法によりて隱微を捃摭し、あるも西洋華文の術よりて幽冥を闡明し、己か心のひき〳〵ふ何やくれやと論ふめれど、畢竟批評か作家の美を顯もして文壇の木鐸とあり、兼ては讀者か文學に對する好尚を高くもるに至りては、げぢめある事なかるべし、さはいへ、如何ふ極端に走り易きの日本人の常とはいひなから、支那の批評と旨とするものハ、稍もすれハ諂媚阿諛に陷り、西洋の批評を本とするもれは、時と〳〵ては誹毀嘲罵を目的とするこそ心得ぬ業なれ、諂媚阿諛は暫く言はず、若〳〵批評か單よ誹謗嘲罵を以て目的とするもゐとせは、世ふ批評ほど厭ふ可たものハ非らさるべし、空よ照る月影、如何ふ其光のをやかなりとも、一ひら二ひらの曇りれなきやうやとある、梢に咲く花、如何に其色の愛てたけれハとて、たまにハ小かねの害のあきものかは、蚤取眼を開ひて僅の瑕瑾をかなぐり出さんに、如何なる名篇か誹毀嘲罵の犧牲たふさるべき、畢竟西洋れ批評か創作を品隲〳〵て、あるは之を教訓し、あるも之を忠告し、或ゑ時としてゑ之を叱責するゑ、恂に批評家か文學ゐ指南車と〳〵て、つとめて作家を勸促矯正〳〵て、庶幾くは圓滿練熟の界に導かんとするの誠意のみ、レッシングか所謂或ものか何故に面白く感せしめさり〳〵やを讀者ゐ理會心に訴ふるれ好意のみ、何ろ誹毀ならんや、嘲罵ならんや、彼等終ふ、ミルトンの詩よ紫黃を加へて、却て識者の笑を買ひしベントレーたらずば幸なり。

さはれ、そは大方れ批評に付ていふのみ、元より吾等のは物の數にもあらねは、敢て大膽にも文壇の木鐸なりといハんや、まゝて、諸君を誘掖そるれ大望心ありといハんや、己ふ題して一瞥といふ、唯通讀の際心ふ浮びたる節々を諸君ふ御相談するゐみ、諸君金玉れ作を輕重するにゑ非さるあり。

閑話休題、本文に入る、藐姑射の山ゐ照る月の棚引く雲に影消えて、齋場の庭れ御火白くたけぞを死もる我心とい、穴勝に大宮人のみかと、袖の時雨に月れ輪の、つきぬ思を音ゐなきて、現ともおく捧げ奉りを眞榊の、色またあせぬ此頃に、校長閣下か斷腸の聲震いせて讀ませ給ひし誄の辭、見るりふに其上の事思ひ出さをて、今更に涙の種おり、論說欄收むる所總て三篇、眞先なるは西田先生の論文なり、霞める眼ぬぐひも敢へず、先天知識の無有と辿をども、まゞ搔きくふす亂り心地ゐ、言葉の綾をしかとは見え分けねは、評せん樣となし、唯同學の某か、此上の御願にハ文中挾み給へる羅甸語を說明し給ふば、彌增に有り難からんといふまゝゐ書き加へつ、島村君の論說ゐ移る、君か豐富なる詩情い屢文苑欄にて窺ふとを得て、日比の喝望半ハ醫をたれど、論說ゐは初陣の君が、眞甲に振り翳し給へる初太刀、見事わか三寸の胸板を両斷し得るや如何に、道德と經濟、これ尤も興味ある問題の一なり、われは先つ君か此の如き有趣れ問題を撰とれさるを祝す、されど、經濟の片端たにとくと味はぬ我等風情か、君の文を讀んておぼろゝゐ得たる腦裏れ印象を搔ひつかんで、とやかく評せんとの烏乎がましければ、委しく評隲と具眼の士に讓りゝ、見渡せと、韓信か背水れ陣なふなくゐ、發動的動力と受動的靜力の逆茂木うつたる、社會進步の道途を前よし、滔々一瀉千里を流るゝ社會主義の暗流を後にし、道德と經濟の本陣悄然として控へたり、前後の要害流石に堅固に、何處をうち込む隙とておゝをど、淙々たる背後の水聲ゐけをされて、爐火凍然、寒山萬里の夢とハする兵士の狀態哀をげなゐ、今少し炎々さる熱火を燃やして、彼等ゐ苦營慘憺たる悲境を救濟するれ策なくんは、折角れ要害も賴にはなふさるべし、文い淡々、此種の論說には適當なるべし、春秋君の厭世と樂天、いつもの遒健おる筆致に反し、これは又瀟洒なる書ぶり、中々にうれし、其人生れ無常を論し給ふあたり、グレーがカントリー、チャーチヤードを讀む心地して、ウルフ將軍にあらねとも、床しとも床し、未た僅ゐ廬山の一角を望とたる許りの今、峰となし巒となそとのいとも難けをは、唯此問題に關して我の抱々る心の端を筆にいハせつ、君の說とそれのとが符合するや否やを他日にトせんとす、實ゐ世界の善惡か不可知的のものとするも、厭世樂天の問題ゥ決すべからさるものに非ふすといふは、御說の通をなり、畢竟、樂天家か萬有の現實と吾人の生活を目して、善なゐ、快なり、眞なり、美おりとするも、厭世家か之ゐ反して、醜なり、僞なり、悲哀的なり、沒趣味なりとそるも、皆主觀的狀態の如何ゐよりて其認識を異ゐするれみおるとハ、冷々とを常に同一の軌道を廻轉する明月を仰て、或は朧月夜に如くものぞなきとあれゥれ、或ゐ我身一つの秋ゐはあらねとと嘆つゐても知をぬべし、然らハ則ち、春の月を愛つる者是か、秋の月を恨むもれ非ゥ、此ゐ至てゐ現實と理想とハ果して一致すべ死ものおりや、將たあらずやれ問題必然として起ふんとす、何となれは、理想現實の調和衝突は、主觀的狀態を兩斷すべ死もれなれゞなり、想起す、レスボス島れ朝ぼらけ、ロイカデア岬頭、海風輕く紫衣を玩ふの處、空に映するフロデテーの火を仰きつゝ、花輪繞れる生命の花萼を棄てゝ、身を激浪に投して天上の星ゐ歸りゐる女詩人サッホーよ、彼は死によりて此問題を解しぬ、ヘシオット亦曰く、嗚乎死なる哉死なる哉と、然ふゞ則ち現實と理想は終ゐ一致し能ゐさるもれゥ、人生終ゐ死によつて浮世の塵根を截斷し、滿身の汚血を爛々たる星斗に噴かさるを得さるの、人一度思を死の問題ふ致せは、天地は寂寞として百事悲

慘の間に沈むべし、而も世界い果して陳子昂か所謂、前不見古人、後不見來者、念天地之悠々、獨愴然而涙下底の寂しさあるものなるか、あらず、ゲーテは曰く、如何なる時代にも煩腦者は絶望を獲ふんゝ爲めに、空望を蒔くと、曲眉豐頰の前に媚ひ後に戯るあるを願ふもの空望に非らざるか、鉅萬れ金を積て猗頓の富を誇ふんとするもの空望に非らざるか、己に空望あり、何ぞ絶望に終らざらんや、而も現實と理想とを調和せざるもれと言ふ勿れ、空望も理想たるを妨げは、然れとも理想の墮落せるものなるを如何せん、若し此の如きもれを以て眞の理想とおさんの、陋巷の裡僅かに一簞食一瓢の飲を貪りし顏回れ如たは、己に己に絶望の窮鬼さふさる可からむ、而も終に其樂を改めざりし所以のものは何ぞや、彼は高尚なる理想の露に沾へもなり、彼ハ理想の終に現實と一致すべたを知るとあり、假令時に通塞れ勢あるも何時かい回陽の春あるを信すれハなり、理想終に亡ひず、天地寂寞に非らざるなり、人事悲慘に非らざるなり、されとにや、東坡は黃州ゐ流謫せられ、布衣蔬食、僅に僧に從て一餐するに當ても、尙旦水到渠成至時亦自有處置と唱へ、未た曾て憂色なきもの、何そそれ達なるや、又彼れミルトンを見すや、轗軻漂零猶彼か毅然さる精神を挫折するゐ足らす、逶迤窴斥猶彼か昂騰の氣慨を鎖磨するに足らす、嗇然たる一個の白頭翁、尙且烈々さる心火を丹管に驅て、筆端詩神を躍如さらし先に非らすや、然らは則ち人生厭世に非らざるなり、されはとて、吾人ハ人生を以て、嘗て春の氣か五月遊びに黎明と戯れて、濃藍の菫や露にぬれたる鮮紅なる薔薇の花圃に胎まれたる和樂あるとハなさず、溢美の讃聲に傲岸の頭腦を鈍ふせて、斷頭臺上なほ天祐の降下を夢みたるエグモントの伯爵ありとなさず、得意は人をして心を外に驚せしむ、

艶治たる花壇乃蔭、焉んぞ知らん、毒蛇の隱るゝなきを、愛らしき戀か常春藤の冕戴ける酒との間に生ゝたる淑女か、やがて三途河畔陰府の門衛なる怪魔と化し去るなからんやハ、人生樂天に非らざるあり、然らい夫れミルトンれ所謂沈鬱か、人生已ゐ一の羈絆にして、人生るをハ直に因果法の密網に落つるものとそれハ、何ぞ世事れ悠々を以て浮雲聚漚とし、泛く天地を觀て物外に超へさる、ミルトンか歡迎する所のものは、偶坐凝念の靜觀あり、彼の樂む所い所謂一穗靑燈古人の心あり、幽閑ある天然あり、靜寂なる情緒なり、眞摯なり、敬虔なり、同情なり、純潔あり、己に內に省みて思を穢土の塵根に馳せず、沈思自照、諸緣を禪脫し、萬事を休養し、是非を念はず、善惡と思はず、大空大寂、我なく人なく、嗒然として偶を失ふ、豈に悲戚あらんや、憂愁あふんや、而も心地自ふ閑適、恰然として其樂を改先さるあり、嗚乎至聖なる沈鬱よ、ヘメラよりも美しき汝沈鬱よ、ヘスタの女神とサタン神との間に生まれたる純潔眞淑天を脊めを人を恨みさる汝沈鬱の女聖と、來れ、われ汝と共に天年を樂まん哉。

雜錄欄にわけ入りは、常ハ春れ野の千紫萬紅をこきまぜて、葉末ゐ置けるミュースの露に探踏の眞袖を香はせし風流ゐ引換へゝこれは夏木立の色鮮かにてり添ふ樣の嚴かなる、孰れ勝り劣りハあふさる可けれど、花紅葉を手折らんハ後乃文苑にても足りぬ可けれバ、若葉の下蔭いと濃りある畔、讀みて一服の淸涼劑とせんも亦可なふすや、前號よハ、ちる花をみなへしもち來給ひて、戀しれ春れりさみを示し給ひし高橋先生が、此卷ゐは無品親王服色考を載せ給ひて、該博ある考證に吾等後進を導先給ふ事の有り難さを、とこうの言葉も出てず、これを先生か七十路れ老の寢ざめの東

の間も、心をこめて物し給へる長文とこのや聞々ハ、まだ末長く我等を裨益し給ふとあるべし、レオパアデイと「僧」列爲斯、共に西の國の天才あり、前者とBT先生よりて物せられ、後者は太郎生乃君の遙るゝ送りとされし賜物なり、レオパアデイは伊太利れ詩人なり、年僅かに二十歳、To Italy 及 On the Monument which Florence was about to elect to Dante を歌ふて、當時第一流の叙情詩人と稱へられし人、BT先生か伊太利文學に指を染め給へる事は兼て聞きはるとなるが、先生の西歐に名聲嘖々さる非凡の天才に遭遇して、其性行を審かに給へは、其思想の一班と共に詔介し給へるは、僅かに其名のみは知れど、二三の斷片さに窺はず、況して其文學を味はぬ我等にとりては、床しとも床し、太郎生れハ城の物怪と著はして、蘇格を驚かしたる一代れ才子、傳は極めて簡單なれとも要を摘んて遺憾なし、世の常の山のたゝずまひ、水の流、目に近ク人の家居有樣にても、畫の上手ハいと勢殊に、實ふと見もるまでに、懷ろくやはらびたる形あるを、靜にか死をするものありとかや、されハ、君の輕妙なる筆致と溢るゝ蘊さ才情とは、水の中の月鏡の裏の花ありとも、清き光馨ハ一き香のあがらでやは、されど、恥かしあるこら未た妹毛野の玉の顏に接えたる事あき吾等ふは、匐出匐入る蛆虫の鬢の外れに繞り行く心地して、あり一昔の道德家よりあふねとも、胸の潰るゝ凄さ恐ろ一さハ、是非もあき次第あり、阿倫楚の假面のそひて、呀と むかりに魄消えたる我ハ、かくては精神的修養の未た足らざるをかこちつゝ、義山子の武道初心集拔抄に移る、日夜十數の學課よ齷齪一て、血あく涙あさ眼に、君の親切よも附け給ひ一大小の圈点一生懸命に迫とつゝ、やつとのとに讀み終りぬ、六千二文の蕎麥切食て、大事の命ふ慰斗付々たる笑止さにも、矢張武士道といふ事はありと覺えて、拍案正襟感發銘心すべきもの少あかふず、平凡ありとあそこの、多奇あとあすゝとの御尋よ對しては、極めて平氣に、極めて虛心よ熟讀玩味するに、平凡にも非らず、多奇にも非ふず、寧乃兩者の間にあふんと答へんのミ、若し君ゝ例の鋭利ある筆法を以て此意を敷衍されさらんよも、興味一入津々たるものあとしあふんといふ。

咲きの盛りの梅の木蔭よ、それかこれかと暮れ惑ふ里の童には、あはれ鶯もがあ、飛ひ來りて我に花のよ一わしを敎へよ、二月の雪の袖また寒き春あかふ、香村君か手鹽にかゝてそだて給ひし室咲の梅、香ハうすけれど花と愛でたし、草野君か斧の柄の朽もせで、毎もあこら文苑に耕し給ふ豪駝の功ハ、我等の感銘そる所あり、されど、つく〳〵と獨りむかへも我身さへ月の中ある心地ふそそれと迄行かすとも、今少し同情のありたきものあり、歌ハ中なるか白眉と覺も、高橋先生の悼の詞、高根の雪の彌高ケを仰きて、見るかふふ血ふあかぬ人ゑあるべき、奉詠熱田神劍歌ハ福井君の作、嚴かある書きぶりあり、和歌と餘り數多々れといはず、俳壇は豆男吐虹樂園の諸子去り給ひしより、秋竹子獨占の舞台、敢て寂寥といふ程にもあらねと、何とやら物足ふぬ心地を、春季二十五句、此道にかけては盲目の墻のぞきあれは、評せん樣ハあし、唯行列をさけて馬引き入るゝ春田哉は、秋竹君得意の作あとと聞けハ、序あから紹介し置く、漢文と跌宕の姿、縈紆の趣あと、取りぞりふ愛たゝ。

我先代ある太液子の、垂綸東涯君の物せる那谷の旅づとの評ハ、ちと異論あれと今は贅せず、臨川子か馬卿の君よ寄する長文は、いや味たつぷりの處贊成一難ケ節もあれど、一讀の價値はあり、わ

か思ふ所をいはんに、實ハバイロンが

I live not in myself, but I become portion of that around me;
And to me high mountain are a feeling.

といひけん如く、詩人か一般に同情ゑ富み、已か有せる想像力を役して一想連想を惹起し、現實以外ゑ主觀的の觀念を描くハ彼等の常あれハ、自己を圍繞せる萬有を開眼せしめて、一微草の戰き、一細流の囁きも彼等にハ情緒ある如く思はしむるものあり、されは、彼等の紀行も已か跋渉し、つゝある山川の景色をかりて、已か遊歷しつゝある自然の風光を用ひて、已ゝ志想を客觀ゑ主觀に描寫するは勿論のことあり、されど、馬卿の君ハ彼の夏期跋渉錄所載の三君を以て、詩人の模型に入れんとし給ふは、ちと早計にあらずや、勿論三作家か各特殊の形管を有して、本誌有名の作者ありといいへ、目して詩人とするの資格ありやハ吾人の疑ふ所あり、されはとて、眞正の詩人ゑあらずとも、多少詩的觀あくてやハ、臨川子ゝ、彼等の詩的觀を窺はんとあらも、作家諸子は別ゑ篋底に藏する金玉の稿を示されしあるべしといもるゝ程詩的觀に富ゆりとすれハ、三君かウオルズオースの所謂(惡口に過ぐれど)、生母の墳墓の上をもあさりて植物を採集すてふ科學的の旅行あらぬ以上は、何ゝ故に三作家か內ハ包藏し給へる同情の半分ありとも、詩的觀として迸り出てさりしや、疑はしき限りあり、何とあれは、詩的觀と物ゑ應して生するものにして、或時ハ限りて起るものに非らされもあり、さはれ、大体は臨川氏に賛成するか故に、馬卿れ君に對してハ詩的觀を含む紀行文は文の上乘なるものあるべけれと、不幸にして三君も詩人にあらさりし、されと、假令詩的觀あるとて、紀行文は紀行文ありといひ、臨川氏ハ對しても君か議論の薄弱あるを惜む。雜報の寂寥あるは近來あれ所なり、記事なき故となふは是非もなし、終ハ臨て一言以て全篇を評せは、曰く、可もなく不可もなし、あなうしこ。

與臨川子君書

藤馬卿

臨川子君閣下、閣下ハ本誌第拾四號批評欄に於て、本誌第拾二號に下せし余か妄評を、更ハ評難論攻せられたり。余はこゝハ多謝す、閣下か學課多忙の時日を、不學余の如きものゝ教正に費消せふる、實に其の同學に對する情の温あるを、且つや閣下の文を行る毎に諷刺的警言を以てせふれたるを。

余ハ併し閣下の論議ゑ服すべかふざるものあり、且つ又余の先に有せる意見ハ關しては、庇護辨說の責任あり、故に聊か余か所思の卑見を陳ぶて、余か責務を盡し、閣下の教正を更に乞はむとす、否同學諸君の心裏に訴へて、余の所思か如何に不合理の頂極に達しつゝあるや、果ゑ閣下の高說かいかに世界合理の頂極に達せるものあるかの判斷を願はむとす、固より余の說く所至つて陋、閣下の論ずる所至つて得さるも、敢てわれ人の喋々を要せずして明也、雖然記せと、世には時代の異差と、意見の異差とに由りて、種々の考想を個人の心鏡に映寫せるものさることを。

臨川子ある雅號のみハてハ、同學の士よりも徒ふに長きわが丈てふ表面のみよては、余と閣下の風采如何其他閣下に關する凡事を知悉し得ず、例令閣下か余の責任を以て草すといへる言ハより、

余が本名及び雅號を暴白せられたりと雖、獨り閣下が匿名にて余に寄せられたるも、閣下自閣下の言を食ミ、その責任を以て余に寄せられざりしかやを疑ハる、雖然余ハ敢て閣下ハ答辯を拒むものにあらず、敢て閣下を憤るものにあらず、

余陰に閣下の余に寄せられたる文中、源氏物語、大鏡の故典を卒のめりせられさるを以て、閣下を推察せバ、いりにも昨年大鏡を學び、今年湖月抄を講じ玉ハ人あらむと思ふ、こハ僻目か、さらバ宜ろく不禮を恕せよ、然らずとも湖月抄、大鏡の典故を引證せられさる程の、博學强記ある臨川子閣下が、批點を圈點と誤り玉ひし如き御手際は、實ハ感歎の外あし、讀者諸君、、符ハ批點にして圈點にあらず、圈點あるものハ、讀ミて其字の如く。符(等の符をも含む)あるとハ、余の敢て贅せざるも、大學素讀を終へさせし七才の兒童も了知する所あるは、諸君の既に了知せらるゝ所あらむ、然るを何ぞ、臨川子其誤を犯す、われ人と大ふおを惜む也、吁。雖然臨川子はこれを植字の誤ハ歸し、りの責を脫免せむとするが如き醜体をあし玉はざるも、余の深く信ずる所也、何者余は本誌第十四號印刷の際、活字校正の一部分を義山養愚君と共ハあし、臨川子の原稿あるものを數回閲讀しされば也。

余は先づ閣下に問はむ、閣下ハ如何ある所見を以て、余の批評に對ろて論難を逞ふせられさるかを、想ふに閣下は十分別箇天地の意思を所有せらるゝあらむも、その余ハ寄せられたる文も、余り第十二號れ作家諸君に盲從あし過ぎるに非ざるり、爲に幾分か筆端を束縛せられ玉ひしは非ざるか、こも大に余の惑ふ所也、假令余の妄評を非難するハ、必ず余の非見に對して、左右是非の言說を以てすべき地位に立ち、己か所見を十分に吐露し能はざる不利の舞臺に立ち玉ふとも、閣下の如く徒に盲從的服從をあさず、別に余の所見を非難すべき地優に存しさりしあふむハ、惜哉閣下はこれをあさゞりき、否々これ余等如た不學の孺子を敎ふるに、何の他に及ぼさずとも敢て不可あろとあし、閣下ゞ博學の余地を世繼の翁に傲ひて、五岳嶺南の大僧を氣取り玉ひしあらむ。

これよりすゝみて余は、閣下の非難に答へ、且は閣下の意見をさゝりむと欲も、閣下は近時大流行の論理的根地を以て。余が美所に弱點が潛伏せざるやと疑ひさりしに對ろ、退歩ハ退歩、進歩は進歩也、其間一個の混同あろと詰ふれたり、大に然ゞ閣下の言や洵ハよし、さをゞ閣下ハ數理上に於て、積極の極限と消極の極限と相合すといへる定理あるを知ゞ玉ふあらむ、又社會人事の行爲に於て、大勇と大怯と相似さるものあるを知ゞ玉ふあらむ、されバあり、美所と弱所とハいかハ親密ある結帶をあしたゝあるものあるや、こと余が殊に贅せずとも、歷史の確證に委ねむ、よしや富豪の前搆をあすも、内と別名アイスクリームの鬼に責めふれ、毎ハ風波の絶ねざる家あるを、閣下は熟知し玉ふあふむ、こも余が大に美所の幕下ハ弱點の潛伏し、皮膚雪をも欺くべき艶肌の裏に、ハ、楳毒惡血の潛まるあたやを疑ひて、本誌の爲に前途を祈りし所以而已、豈敢て美と醜との定義を混同し、進歩と退歩とを同一茶椀中に於て、五目搔混の三杯酢の陋をあさむや、余不學ありと雖、亦幾分か時体の如何あるものなるやを知る、未だ曾て桶屋と大工と混ぜし事あし、雖然世体の變遷、人事の轉移、物件の替交に於てハ、極限と極限と相接し、相抱的握手をなすものたるを知る。

われ人は、更に閣下に問はむとする所あり、閣下の所論に對して、心大に疑を發して、今も尙卒解

せざる所あれば、閣下ハ論理的尺規的定義を凡ての事件ニなさむと試みられつる風を、余が述記せし退歩進歩の點に向つて、嚴確に表いーおがら、何ぞや人を非難せむとして、反つて閣下自ら陷るものあり、閣下自撞着をなさて、得さりと甘むずる所あり、知らず閣下の所思如何、こと閣下が作家と評家とを、混同せるによりて、われ人の提出せる緊急問題也、世ふは評家たるものハ少なくとも、創作の才を有せざるべからず、作家ハ少おくとも、批評的眼光を以て、創作ホ從事せざるべからず、と稱ふる士ありと雖、評家と評家也、作家ハ作家也、勿論其間ニ混同あるとおし、例令世に作家にして、評家を兼ぬる忍月、鷗外、抱一庵、逍遙等の如き士あれば迚、そは只個々の別人物として、同体の人が、個々の志想を、個々の範圍に表發せるに止る而已、豈敢て其間統一の連鎖あらむや、閣下は之を知る乎、勿論評家作家位の區別ハ、十分了知ゑ玉ふ閣下也、雖然閣下が、人を責むる一意よりして、一時ろの所見を掩ひ〜如況ハ、實ニわれ人の取ふざる所、むしろ大ホ閣下の爲に泣く所也、さればよ若し閣下ぐ、余の莊子管見の夢を望みし迚、詩人の覺悟を追想せし迚、水上ニ游泳せる鶩雛を咎むる母鷄の心を以て、否その孵化の勞ざよなさゝりし余が、ショペンハワア語錄を、その譯者BT氏ニ、層一層れ心掛を以てせふれむとを望みし迚、余を自ら奮へよ、などゝ責め給ふ理を以てせば、世ニも作家なふざる評家が、作物を評する事決して能ハざるおふむ、又孵化的の勞を取ふざりしものは、之を患へて言をおすの權利おさおふむ、吁、それ然る乎、知ふず世にハ之に反せる事のみ多きぞ怨なる、君見ずや國家當路の事局ニ身を縛せずして、國政を左右するの政論家あり、時事を是非するの政客あり、その時代に生れず、その時体如何を目擊せずして、古今を批評する歴史家あり、否こはその政客政論家歴史家のおも業爲の部分ニ止ふずして、その必可爲的業爲也、これ大綱を失しては、歴史政客政論家なるものゝ存在を認めず、批評家おるものゝ價値を認めず、且つや社會事物の進歩は、その幾多れ場合、幾多の人々ニ由りて、評議せふれさるに歸因す、研究といふも評論といふも同意義のもれ也、而おて實行といふも只評論を實踐するの故のみ、依りて想ふに此世界ハ、評論といふ基礎れ上に築かれ、人類ハ評論といふ渦波中ホ游泳するもれさるを、而り然してその評論をおすもの、性質制限に關してハ、何等の干渉束縛もおきものさるハ勿論也、否吾人人類ハ、この評論界ホ生息するれ義務として、ろの評論と必ずおさゝるべきふざるもの也、然るを閣下余を責むるニ、猥りに余のなそべき範圍を限定せ、余ハ未だ閣下に余が私權の範圍を限定するれ依頼とせざる也、況んやろの事たる閣下が自家撞着の所論に出でさるに於てをや、よしおは一歩譲るとするも、閣下は彼乃滔々さる政論家を芟除せむとするか、彼科學の進歩を沮止せむと欲するゑ、おれ到底閣下の力能くなし能ハざる所、然ももし閣下の心中に、この評的行爲を省さて、他に社會の進歩を促す方略おきに於てハ、閣下ハ實ニ社會的大罪を犯せるもろ也、余輩薄學と雖、作家評家とを混ド、尺規的と概括的との混同を望まず、社會的大罪を犯さむより、むしろ不如社會渦波の中ホ游泳せむのみ。

余ぐBT氏に告ぐるニ、哲學者れ語錄を編むに當りて有すべき心掛を以てせり、閣下余を責むる亦此點を以てす、余ハ既ホ前項ニ於て之に對へたり、然も更ホ略言せむか、余ぐBT氏ニ望みしハ余の卑見にして、抑も亦哲學者を紹介する人の心得べ況事と信ず、人を紹介せむとするもろは、

其性質の一部のみならず、全般をも明了に紹介そべき也、若し只その一部分に至りても、被紹介者を跛者となし畢るものたり、未だ以て紹介するの責を十分に盡せしものに非ず、故を以て余ハ、古今の偉人物ショペンハウアを紹介せしBT氏の反省を促がせ〻所以也、ショペンハウアを十分ゑ表はし得ざりし罪ハ、BT氏の輕々筆を動せしに依るもの、豈敢て余が自ら之を尋ね、或ハ地下ゐ彼を起こして、之を問ゐの必要あふむや、人を紹介せむとそるもの責の重は、別段喋々の要を見ざるも、更ゑ一言以て閣下に告げなむとするものあり、乞ふ之を記せよ、世の小説家が人物を描くゑ苦心經營をゅさぬる所以ハ、果して何故ぞ、その描く人物の性質を〻て、所有性質以外の跛者たふし免ざふむと欲するにあり、その人物を描くは、その人を世間に紹介そるものなり、されど人を紹介せむとするもの〻心意と、宜〻く小説家の苦心の如くして、以て能事畢る也、以て義務を盡し得る也、これこの理由あり、余何を以て血迷ふべき、何を以て木により魚を求めむや、閣下の偏見も亦甚〻ふず哉、余陰に想ふ閣下の説の如く、BT氏は余の爲ゐ一滴の涙も流さず、心ひそかゑ笑を釀〻玉ひ〻ふむも、閣下の盲從的庇護には、潸々涙を流し、心ひそかに苦笑し玉ひそなふむ、閣下の辨護あまり難有迷惑すぎて、反りてその陋を示したれと也。

余の夏季跋渉錄を評するや、詩的規矩を以て以上所含乃三篇を評〻たゑ、閣下あれを以て余を責むるに、本會誌の規約を説明せふる〻と甚矣、洵に嬉〻き次第なりき、雖然閣下よ、詩的なるものは決して或一種の文にのみ限りて表ハされ得るものなふず、如何なる種の文にても詩の漂渺と出現するもの也、否出現せふれ得べきもの也、何を以て之を證せむ、乞ふ政教社發兌の山水叢書を讀め、

如何ゑ詩の趣味淳々溢る〻如くあるかを、知るに難かふず、而そてその書ハ、主と〻て科學的に山水と人事との關係を記せ〻もの也、然れど詩的なるものは、獨り彼ゐ存ゞて此に存せざるの理なきものゑ非ず、余はこ〻を以て、夏季跋渉錄を云々せ〻のみ、何ぞ閣下が岡燒三昧を購ふ意なふむや、亦特ゑ作者ゑ詩の爲め、記行文を作れよと進むるものなふむや、只不知不識の中に作者の心意を窺ゐむと欲するゑあるのみ、作者の想ゐくありて后記行文たるを得といひ〻のみ。

余が豐泉氏の五個山紀行を評せし寸言を以て、一概に閣下と余の所論を破碎せむと勉免さり、閣下は部分を以て全体を破るとを得と信せらる〻も知らねど、余は未だそかく思はざる也、閣下余が記述せそ言の意義如何を了せずむゐ、更に熟讀せと、余と照應のみを以て、紀行文の唯一可務の体と言はず、豐泉氏他の點に於て、他の作家とり現形の波瀾は成効せ〻と雖、他の作家より照應の點を勉免ざりそといふにある而已、よ〻や他の二作家が、照應の點豐泉氏より優りたりとも、其他の點に於て豐泉氏程、成効せざりしを比較的に記せる而已、閣下少〻く想ゑ、こ〻に一個の美人あり、其星眸或ゐ涼しかふずと雖、その額、その鼻、その眉、その髮、その腰、その歩、共に優美なれハ、固と り完全の美人たふずとも、他の三平二滿に比そては、必ず美人たるを免れず、決して美人さるを失むず、閣下ハ彼を指〻て美人たらずといふか、彼を美と稱するものを目〻て、美の定論を謬れりといふか、蓋しその美人と稱そるものは、醜の醜かるものゐ比〻ていへる也、その醜者ハ只星眸のみ涼しく、この美人に優り、他は悉く醜かるもの也、然るも閣下は、尚ほ盲者探鼎的の言をなすの、あふ笑止の至かふずや、余と先貢ゐ於て論理的志想に富み、定義的分割を好む閣下と思ひ〻ゑ、果敢

なや今ハ然ふず、閣下は他の文を推繹するの力量に乏しき人ならむとと、驚歎の外更に言なし。

余は義山氏の御嶽立山紀行を未完おれども評せしい、ろの夏季跋渉錄中ゑ附せふれゑるを以て也、他の二作と衡を失ゆざふむが爲也、而して余の愚作阿奴浦の一夜を評せざりしハ、固より自評を避しなりと雖、亦幾分りその結果を隱さむ心に出ゑ也、御嶽立山紀行ハその結果を斯々おまと十分に見たれい也。

其他の言に至りては、閣下の言を十分程よく聞ゑたり、閣下の言亦一理あるを知りぬ、故に余は敢て答疏を逞ふせず、されば迚閣下に服ーたるゐ非ず、閣下が言從的の中にも成効ーたるものなりと見しによる。

今や余と大概閣下に答へたり、雖然余が意中未だ盡さゞる所あり、更に他を說ゑ余が先きに抱きし見を明了に、大活に庇護せむと欲すれども、如何せむ身ハ、舊の如くなずふ、余が亡姨、亡從妹等が患ひ〜病症に侵され、時々刻々の苦惱止む能はざるものありて、執筆も意の如くなふず、一字一行、一句一言、吐く咯血に苦そて筆を投ド、嗟嘆の念に堪ねず、故を以て此の文の如きも更に一回の修飾改竄なし、讀者幸ゑ深く尤むる勿れ、雖然これ乞憐の意に非ず、余の負ふべき責は十分負ふて辭せず、乞ふ之を諒せよ、以て答ふ。

末言附して同學に告ぐ、余の本誌第十二號の評を投載するや、藤馬卿の名須藤教授と誤解せられしと傳爲聞く、これ蓋し教授の名求馬、姓須藤おるに由りて生せしものならむが、斗い以ての外の事也、余は姓須藤教授と同ドく藤氏を犯ー、司馬長卿の人となりを大ゑ慕ふの余、其二字を襲ふて、自馬卿と號せし也、こゝに一言辨じて、須藤教授の迷惑を解く。

雜報

春風春雨

頃曆朔を改めて冽寒西に流れ、池塘の厚氷もるく惠風ゑ融くれバ、春は柳條わこぼれて孤芳嫣然先つ枝ゑ上り、清香馥郁、楚々妍嬋として家を遶ぐる、是れ所謂春の候おり、さはれ甘雨一犁若草れ萌出つるに連れ、幽鶯谷を出てゝ磵道の春を歌ひ、櫻桃の枯梢只一時ゑ綺羅を刻みて、花光雲影參差相交り、淡や、紅や、濃や、紫や、曲折層疊歩々人ゑ媚ふるものは、獨り我北國の花期にあらずや。吾曹は「日々夜寒裂肌」くれ白雪界を出て、曦光闌々青帝の駕ゑ陪して、徐ろに此れ香雲晴雪の好季節に入る、譬へバ氷雪萬里、飈風漠々たるサイベリヤの極北を旅して、微雨輕彩、春風月を帶ぶるの夕、歡然とーて巴里の烟花に醉ふの心地おくんはあふず。

春おる哉春や、幽草を踏んで花を郊外に尋ぬれバ花裊々さり、綠塘を渡りて韻を柳下に探れば水澄々たり、海棠の眠氣おる、蜂蝶の翩々さる、薰風の微和おる、果た波濤ゑ似さる遙峰の翠嵐畫くが如く滴るゞ如く、一矚十里、韶光の媚ぶる處、歌人思を勞ー騷人筆を惱さぬいおゑ。

試に煦然たる新晴わ乘じて、大乘山頭碧藍天に連る光景に踞ー、遙に能州の微翠を杳渺の裡にかざー見て、右ゑ醫王山の班雪を仰さ、俯ーて逶蛇たる奔流の間、櫻雲の封ずる百萬提封れ牙樓を睥睨せバ、極天極地、雄然とそて身も三洲の大守を呑むの覇氣を養ゑ得たる想あるべー。若ー

それ春風湖面を拂つて、銀紋漪浪岸を縫ふの砌り、蓮湖の漕艇ハ快中れ最も快あるものに非ずや。長堤三里鎌倉男兒を歌ひ盡えて大野濱ゐ入ま、七里の江心縱横の技を弄えて鮫龍を斫り敵艇を擊ち、戰勝ち槳を横へて孟將軍の昔を忍び、微吟低唱舷を叩いてトラファルガーの提督チルソンを想ふ、赤陽西海に沈み、暮色蒼然松籟を罩むるゑ及んで艇を砂丘わつあぎ、明滅せる漁村の燈影を趁ふて、再び迢々ゑる堤畔を辿る、想ふに豪氣北斗を衝く校友の快技、之に如く者ゑ勿ふん。

其の他野球部員が、綠芝濃かなる紀念櫻碑の畔ま、棍捧一揮、洋々たるグラウンドの春を傳へて、鳴然蒼旻を摩する底の熱球を飛す萬丈の紅霓の如き、及びテニス部員か纖妙ある四十八手活殺の靈腕を振ふて、快舞輕追十歩の陣内ゑ、血花繽紛の凄劇を演ずる大々的マッチの如き、吾曹ハ嬉々筆を荷つて徐に其盛觀の至るを待つ、諸君幸に健在あれや。

北辰會演說會

霜風木葉を黄落えて、形容枯稿存するか如く亡ひたるか如く、萎靡不振の攻擊燒点ゑ立ちて、久く其の殘喘を疑はえたる我演說部ハ、東風の皚雪を拂ひもあへぬ皐月の中院、突如破鐘的の大音聲を振ふて。寂莫たる青春の先登者とあれり。二月十八日扣所に於て。當日の辨士總て七人、多くは雄逸横議舌端風發〜て、餘沫宇内の大勢を飜弄えたるの雄、辨や論や岐巍として優に一堂を壓するに足れりと雖ども、聽衆寥々九十影に滿たず、拍手湧沸笑罵紛集の奇與もあく、冷血動物の冷淡ある痛嗟に堪ゆへけんや。演說の白眉あるもの、態度に於て抑揚に於て、井上協田兩氏を上乘とし、近藤以下の諸辨士之に次く。今其の詳密ある批評は紙面の都合により次號に讓りて演題のみを記さん。

赫々ゑる國光　今西良雄
政治家の資格　井上義章
風雅的明　脇田虎一
君子國の眞面目　松島得男
youth（青年論？）　近藤雋逸
ブル勿れラシクせよ　中村光吉
盜賊と英雄　村上貞吉

雜誌印刷の改

本誌發行以來、一切の印刷は之を東京秀英舍工場ゑ依囑〜來りしが、該舍は由來業務輻輳〜て痛く本誌の發行に大影響を及ぼし、最迅速の急手段を以て督促勵托するも、原稿の郵送より見本誌の落掌ゑ至る迄、少くとも一ヶ月を消費し、爲めゑ季期を尊ぶ豐厚恢奇の時論勁說の如き、概ふ皆十日の菖蒲然たる遺憾あるを免れず、是れ同好諸賢ゑ向て深く氣の毒ゐ堪えざる處、從て又委員か浪遊の責の蝟集ゑる点なり。依て今回更めて當市に於て印刷を行ハしむ。体裁或ハ低劣の杞憂なきにしも非ふざるも、是より以降發行の揚聲を履み誓約に背のずして、庶幾くは以て諸君の高囑を充すを得ん乎。

校内雜俎（十二月ヨリ三月十三日迄）

非職を命ず　教授　福岡精一郎
同　教授理學博士　岡村金太郎
叙高等官六等　教授　河合義文
同　上　教授　上田整次
助教授　德永富
任第四高等學校教授（叙高等官八等）
助教授　須藤求馬
任第四高等學校教授（叙高等官八等）
學生掛を命ず　助教授　日下庄太郎
同　上　同　福見常太郎
任舍監　教授　今井省三

第二高等學校教授　市村塘

任第四高等學校（叙高等官六等）
校長　大島誠治
非職を命ず（三月十三日）
文部省參事官　川上彦次
任第四高等學校長（同日）

級長と幹生。風紀振作の聲春草と倶に舒びて、校威發揚の氣向徐々動かんとするに際し、學制整釐の一着として級長幹生の新規約成る、級長は一級の學生を統御し、品行勤怠を精査して、專心督勵啓導の責に任じ、幹生は級長の指呼を仰ひて學生心得の必行を期すと云ふ。級長は教授に代て幹生は學生、甲も一年乙は一學期の任たり、願ふは、相倶に協携一致、懼々として累々たる美果を收むるを見んか。

種痘施行。痘瘡神あり、爛々たる膿手を伸して、無遠慮にも天下の紅顏美姫を攫にし、苦悶痛呻の間に遽然明眸玉齒の媚を奪ふて搖瑤蘭折の嘆あらしむ。惡むべからずや。滿校の士君子大に之を蛇蝎視して、二月十二、十三の兩日、野田小川諸國手の術下に豫防の点章を双腕に印す、越て十七八日、之を檢診して百三十餘名の小痘瘡神を獲たり。危かりし哉。

新舍監の任命。一夫虛を傳へて萬夫忽ち實を吠ゆ。戒めざる可んや。客膽無賴の一漢杉山某の醜行を誅してより、虛々實々蜚聞喧々として巷衢轉た騷々焉たり。形なきを知らず何の夫ぞ。茲に於てか當路頗る警し、森嚴なる今井教授を以て學生監となし、保安條例的の規的を厲行して以て風紀を未萌に挽回鼓興せんと欲す。善ひ哉其の處置や。願くは寛にせよ嚴にせよ。枝葉を剪除して直に根弊を斷ちさりと速了する勿れ。枝葉は末のみ。腐臭既に根幹に透る、あゝ枝葉と末のみ。

舊教授の消息。岡村教授は職を解くの後、幾何もなく眷族を擧げて東京に歸り、爾來理科大學に出て、誠心植物學の研磨に餘念なし。暇餘雁音を挿みて舊門生の質疑に應答し、懇々肝を發らいて舊生の攻學を勸す。好謝せざる可んや。福岡教授、臘冬雪を衝いて北陸を辭し、京播の野を涉りて一意京姫鐵道の設畫に熱奔す。吾曹は鶴首佇立以て盛々たる大工事の完成速かならんを祈る。鈴木教授、解剖學に淹通せるの故を以て海外留學の令譽を荷ひたる同教授は、去秋颯々の鄉情を佛船に載せて纜を横濱に解き、南溟北水西航三十六日にしてマルセール港に上陸したりしが、鐵路一過歐心を中斷して。皎月玲瓏の夕忽ち獨都ベルリンに客泊す。年の十月八日、快筆を把つて遙に旅行誌一篇を寸全會に寄せらる、輕文緻筆通讀一回して清容彷髣萬里相悟るの感あり。健在可賀。

本校出身者乃現況

昔し双袖を一堂に裡に聯ねて、花晨月夕、友情の馥郁桂蘭に如く、倶に研き倶に讀み共に遊び案を拍ち手を握りて、恰然歡呼したる同窓同學も、苦雖幾年、辛酸の劒嶺を踏みつくして、首尾能く卒業の桂冠を手にし、抃舞抵唱、金樽を叩いて一度送別の祖莚を張るは、爾來鵬翔鴻飛、名蒼茫たる世路難乃楷梯を攀づるの身となり、疎遠疎濶又平昔の感想を宿して、温乎たる當年の舊盟を追念するもの殆ど稀なり。同學尙獨り、況んや先進後進の間、僅に音容聲咳に知己が、一朝轉然分袖後に於ける消息交誼に至ては、杳莫冥々として、互に其の浮沈生涯を知らざるもの多し、豈に怪むを須んや。吾曹非聞、愾然として之を痛嘆し、竊に管仲鮑叔の古交を忍ぶや久し、依て聊

か我校先進乃士の現狀を探尋して、以て友愛厚誼の士に介す。若しそれ濛瀧たる一痕の春月、疎影婆娑として學窓に落ち。天籟寂死して、吐月峯麓杜鵑血に叫ぶの夜。乞ふ讀一讀して我先輩の衣鉢黃卷を繼がんことを想爲と。

明治二十二年七月卒業

工科大學在學中死亡　高崎勇次郎　理學士在大學　木村榮
理學士新潟尋中教諭　松井喜三郎　愛媛尋中教諭　内田雄太郎

同　二十三年七月卒業

法學士内務書記官　井上友一　法學士判事　松寺竹雄
文學士在大學院　松本文三郎　文學士本願寺尋中教諭　藤岡作太郎
文學士死亡　横山正誠　文學士第五高等學校教授　長谷川貞一郎
石川尋中助教諭　阪井乙吾　理學士第二高等學校教授　岡貞三

同　二十四年七月卒業

法學士内務省在勤　倉知鐵吉　在法科大學　松本順吉
法學士東京府參事官　清水澄　法學士死亡　福島淳吉
法學士司法官試補　島田鐵吉　會計檢査院屬　宮本巳一郎
鳥取尋中教諭　中村宗太郎　文學士秋田尋中教諭　松田宗吉
工學士鑛山會社技師　米山良輝　理學士研究中　友田鎭三
農藝化學士、札幌ビール製造會社技師、洋行中、　矢木久太郎

同　二十五年七月卒業

大學在學中死亡　大場嘉一郎　石川縣屬　山形正堯
在法科大學　石田愼太郎　在法科大學　大田三郎
法學士内務屬　横山隆起　在法科大學　松井豐松
法學士司法官試補　山本周輔　石川縣屬　關操
在法科大學　佐藤喜多松　在郷　松本壽太郎

未詳　木島鐵三郎　石川縣江沼郡書記　川崎宇吉郎
文學士第四高等學校教授　上田整次　文學士　佐垣歸一
工學士鑛山會社技師　渡邊英太郎　工學士鑛山會社技師　中西傳次郎
理學士山口尋中教諭　三田村孝吉　理學士第四高等學校教授　市村瑳

同　二十六年七月卒業

法學士遞信屬　深町練太郎　在法科大學　秋洲郁三郎
法學士司法官試補　南宏　在法科大學　長連武
在法科大學　片倉介三郎　在法科大學　島崎鐵吉
在文科大學　松井知時　工學士幽館電燈會社技師　市川誠次
工學士鑛山會社技師　納村章吉　工學士大坂鑛山監督署技師　杉本順太郎
理學士札幌尋中教諭　吉田好九郎　理學士未詳　清水與三郎
在理科大學　中榮徹郎

同　二十七年七月卒業

在法科大學　小倉正恒　仝　上　大味久五郎
仝　上　中川友次郎　仝　上　松平市三郎
仝　上　澤崎鐃二　仝　上　中村尹男
仝　上　國府長松　仝　上　增永享一
石川尋師範教諭　日置謙　在文科大學　大野木克豐
在工科大學　細野安　仝　上　竹田留次郎
工科大學在學中死亡　金子閑男　在工科大學　西崎傳一郎
仝　上　宮地房十郎　仝　上　松村諦成
仝　上　藤岡淨吉　仝　上　納富磐一
仝　上　奥田定一郎　在理科大學　藤田外二郎
仝　上　八田三喜　在農科大學　山崎延吉

同　二十八年七月卒業

在法科大學　堀内秀太郎　仝　上　相良歩
在　郷　鈴谷辰三郎　在法科大學　中村可雄
在法科大學　遠藤泰次郎　仝　上　境長三郎
仝　上　金森外美雄　石川尊中教員　小原清吉
在法科大學　島彌太郎　仝　上　島田文之助
在文科大學　小島伊佐美　仝　上　高瀬武次郎
仝　上　桐生政次　仝　上　阪本健一
仝　上　青木儀太郎　仝　上　春日圓城
仝　上　上岡市太郎　仝　上　能與作
仝　上　鷲尾源次郎　仝　上　大林德太郎
仝　上　白石正邦　仝　上　村上辰午郎
在法科大學　字野弘三郎　仝　上　門脇三德
在工科大學　中屋重樹　在工科大學　今岡純一郎
仝　上　西出辰次郎　仝　上　富田薫
仝　上　青山虎一　仝　上　小島甚太郎
仝　上　若林彌一郎　仝　上　西池氏文
仝　上　鈴木周二　仝　上　木部一枝
仝　上　前川益以　仝　上　本居庄吉
仝　上　高松德次郎　仝　上　壇井松太郎
在理科大學　中川詮吉　在農科大學　米丸忠太郎
在農科大學　中村篤房

（以上諸氏が現時の地位。聲聞。狀態。及昨夏卒業せる諸先進が大學に於ける狀況は之を次號に詳出す）

市村教授乃新任

先生金澤の人、天資秀發少ふして奇逸の姿を負ふ、夙に本校に學び嶄然として器識人に絶す、廿五年卒業して理科大學動植物科に入り、雪燈三年學成りて第二高等學校教授に聘せらる、實に廿八年九月なり。今回偶岡村教授の後任を襲ひ、錦衣輕裘來りて鄕黨後進生の薫陶を管せらる、吾曹は謹で先生の新任を慶賀し、併て吾同學が歡然双手を擧げて好先進を迎へらるを喜ぶ也。聞く先生の文名、曩々として東都文壇に雄飛せること久しと、生等僻學、盛名下風を追慕することを得、何の光榮ぞ之に如んや。願くは講學の餘暇、宏大の錦想を披歴して、雲霧を筆札の間に落し、北辰誌上時に陸離たる疾風急雨の光彩を添へ玉はんことを。

嗚呼七撰手

響に卓犖ある二高艇友の戰聲に應じて、嘯咆的の一大壯檄を滿校に頒布したる我端艇會は、其後屢淡婉の禮辭を盡して、互に庶務雜件の打合をなし來りしが、着々準備の武歩を修めて、鐵驄征戰の部署略決定し、左の七氏を以て撰手に豫定したる由。

近藤他家雄　田中正太郎
傍士定治　田宮春策
高橋堅　鈴木小一
松村大吉

語を寄す、赳々たる七健士、成敗の機、百年の毀譽、集めえて一に諸君の双腕に潜む。快ならずや。然れども敵之是れ蔚乎たる鳳瑞山下長堤に獨眼龍の籌流を學んで。多年覇を奥北に稱する快男兒、我は陰寒霜雪の苦繩に伏し、百里師を懸けて深く楚軍の中に戰跡もの。見來れば彼是の形勢殆ど利を異にも、此際の逆戰、須らく勇敢終

始し。鼓旗整々、血戰に次ぐに血戰を以てし、兩軍馬首相交りて鮮血江に漲り、刀折れ矢竭くるの時自若創痍を包んで而て泰然敵の中堅を屠るの概あるを要す。嗚呼櫻花日に幽芳を放つて征戰の期旬日を餘さず。諸士乞ふ。奮戰快戰又快戰し、更に鐵腕を血塗りにして一大快戰し。敵を鏖殺して捷書を髻に結び、征旗蕭々、凱歌洋々の裡、銀鞍優々白馬に鞭ちて歸れよ。

警鐘亂打

警鐘亂打して士氣頓に起り、昇平久ふして紀綱愈變遷す、蓋し自然の數なり。蓽路藍衣、稜肩を聳て、大刀をたばさみ。曉鐘冷かに郊原の草に寢ねて、朝開の橡粥さながら首陽に餓死せんとするも、靖献遺言を懷にして生死の巷を濶歩し、自ら經綸の綱領を把懷すると稱す。然かも一朝、千歳の風雲に會して闕閣に坐し、綠酒紅燈の間、美人の膝を枕にして醒めて四海の權を握るかぞへ、咆哮したるは三十年前の僥倖兒なりき。峨帽長袖燦として輝光、蒼顏纖手春に堪えざる柳條の如く、錦褥玉床の中にのしづかれて、紫鴛白鷗の興徒につきず、隙間漏る荒き風さえ厭ひ玉ふ若殿の、人生多岐の雲に踏み迷ふて、白屋苔深光の夕、思を春宵の夢によせ、杜鵑一啼の月に泣く者是れ多きは今日の白面書生なり。吾曹は維新以來士風變頽の甚だし光を知る、ああ夫れ然り然るども又西歐射實主義の教文に浴する青年の傾向、勢ひ此の如くならざる可らざるを觀想する也。寒月霜に冴ゆる時、寶刀を呑んで夜半高輪の異人館を燒斬りにせしは、昔し々々子曰的の漢學書生の跳梁時代なりしが、今は滊笛嚠々煤煙空に漲るの處、紅顏花の如き二三の美少年が、車中ミルトンの詩集を繙きて失樂園（パラダイスロスト）を唱し、巨人ターヴェンを捕へて進化論を批評するの時代と成りぬ。此間に於ける士氣の變遷豈に止むをえんや。

智腦を歐米にし、制度を歐米にし、國粹を歐米にし、或は英嵐或は獨雨交もゝ吾曹が椀大の精髓を化育し鞭韃して、獨り風紀の變遷なからんことを絶叫し。世態の腐蝕墮落を以て罪を模型的繩墨に束縛せられつゝある學生に歸す、之を恰も人を酒樓に導きて酒を飲むを咎めたるの類、寃枉も亦馬鹿々々おからずや。

然るに世の頑迷固執の輩。囂々無意義狂誕の駄辨を勞して腐醜焦爛聞くべからざる寒見陋論を世に曝らし、敢て侃々一世の濁流を洗ふおもゝ自惚る。咄何んたる醜漢ぞ、暮夜權門に媚を呈して。低頭俛首黃白の輝光に顔使せらるゝ彼等小人の寢言も此に至て横着極るとゝ云ふべし。

知らず數年の後、三千年來穰々たる祖宗の國を開放して、內地雜居を許し、アリヤン人種の潑々たる烱眼と敏才と識量とに相拮抗するの日に當り、尚蠢々乎たる島國根性を提げて、旨然舊來の舊風習舊遺風に據り、痴言朦論、踞を躪み登を擔ふて、敝裘高屐の風格を死守せんと欲する乎。嗚呼亂打せよ、亂打せよ、天下の警鐘を亂打しつくして、頑陋危辨人を傷々世を欺くの怪物を誅戮し、以て瓌琿博達進取英哲の士を起たしめよ。

二學期試業

春眠一過覺光來れども、南窓既に朗々たる呼唔の聲を聞く。是れ同學が二學期試業の豫習なり、碎磨砥礪、目耕筆耘を重ねて經史百家みな胆裡に納め、窮理窮詰餘力を餘さず、此の如くして始て試驗場裡のヒーローたるとを得、總敏の才に非らずんば固より能はざる也。學生の境遇も亦骨折れる哉。然れども廿七日以後は、羈絆を解いて籠鳥の放巢に歸るの諸子。飛翔奔舞唯それ想ふまゝなるのみ、一旬の苦學豈に大丈夫の恐懼するに値ひせんや。

大島前校長閣下

新綠鬱々習風に櫛りて。母梢反て秋凋の嘆あり、響ふ市村教授の新任を歡迎して、喜思未だ弭まざるゑ後感悵然として仍ち集まる。我校の近事焉んぞ然のく喜喜関愁の頻々さるや。今曉飛信あり、忽爾として我大島校長閣下の解職を傳ふ、吾曹仰讀、茫然として自失し、幅抑聲を失ひ迸涕交もゝ〳〵横る。戚然手を額ゑして瞑思切々さながら啞子の暗中に迷ふが如く、六百の黨友婉として悉く風木の恨に堪えざるに似たり、校友相會ふ、則ち威を脩めて低掌前校長を語る、想ふ、驚憂の大ある匍匐ゑて往て哭するも言何んぞ能く盡さん。此の日午後二時、靜勝館に於て告別の辭あり、職員學生一同、俛首佇列肅然として聽ゑ。閣下謙牽通美、榮を遺れて自ら居らず、告げて曰く。

回顧すれハ五蘂葛、就任の卑話を諸君に呈したる此靜勝館に於て、今や草々告別の遺誡を諸子ゑ贈る、感愴何んぞ禁せん、自ら耻つ、嘗て宣誓企畫したる當初の懷抱、未だ金甌の實蹟を納むるゑ及ずゑて、俄然分袖の非遇に會ふたることを。尸位曠職の責ゑ余は之を甘受するも、唯眞厚赤情諸子を悃愛したる一點に至ゑしハ、敢て人後に落ちざるを信ず、と、肺肝蔽ハず至誠晰々辭に出で、人の臟腑に泌す、進で縷々校務の釐革進行上に就き陳述を續けふれ。更ゑ、

新校長と余が親邇の友にして教育ハ經歷あるの士あり。諸子乞ふ、愼重校紀を遵守して、温恭新校長れ統揮を奉ゝ、研々勵學ゑて成業の速からんことを期せよ。殊に職員諸氏に向てハ、魯愿の策を抂げず、多年正實に補佐啓導の勞を執ふれたるを謝し、併て見捨つるに忍びざる吾親愛なる學生をと。將來尙一倍の懇篤を以て教誨せられんことを希ふ。

滿場悄々、聲咳の音だに洩れず、怨風依々たゑ、哀れげゑ六百の短袖ゑ碎々し、健兒憑々惜別の辭ゑ堪ゑず。愁然として聲を飲み涙を揮ふ、嗚呼大島前校長と別る。以後秀手たる風采を想望し、衣を懸けて奕々さる仁聲を仰がんと欲するも、參商の地を隔つる、憾むらくと唯夫れ涕泣雨れ如けん。悼哉、數行の字勉ゑて離歌に代ふ。(十三日夜記)

泣言二つ

第一議案。粗辭を以し一札言上し奉り候、餘れ義にと無之候ゑ共、彼れ裏門開放の件、前號貪眠生殿の投書にも相見ゑ候通り愚生も至極賛成致居候が、わけて昨今ハ春眠不覺曉ざるの候ハ御座候まゝ、愈益通學上少かゝぬ不便を感じ居り候次第なれは、何卒此際特別の御處置を以て、篤と御協議被下當世風の讀會抔は勿論省略乃上にて、至急御開放相成候樣、頓首百拜して再び請願ゑ及び申候、若し又彼是と頑固の輩の反對抔有之、勢ひグツ々々委員附托說抔ゝつぎ出し候場合には、乍憚拙者馳せ付々申候て、該議案提出の理由、滔々と相辨じ申可く、決して外樣方へ御迷惑は相掛け申すまゝ況覺悟に御座候間御安心れ上御採決々々。

第二議案。是と小生意氣なる申立ゑ候へ共、毎朝學生登校れ砌、短日れ時節柄にも係はらず、遙る〳〵本門より數町を遠廻ゑして、ノコ々々と扣所に勢揃仕るが如き義は、何分ダラクサクて閉口の至に御座候、こは世事萬端輕便を旨とし タイムを惜ミ申候時勢の學校に似合と しかゝぬ御規則と存せゝれ候に付てハ、前件同樣一大御奮發を以て、堂々玄關より昇降差許し被下候樣奉

願候、尤もむさ苦しき乞兒下駄ひやかし草履なと着用れ者供い、矢張り懲罰の爲先遠廻り致させ候方可然末事ながら一寸申添候。

時習寮の近況

慘風悽雨幾十年、大槻傳藏の面影い、獨り殘り下渠數株にあり、花咲い蝴蝶の夢を迫るべき三春の行樂、月冴なゞ古槻の夢を語るべき三秋の愁、愁樂共ゐ渠數株にあり、一列の老杉葉赭を帶びむか、秋來りて風腥く、數株の老杉幹の苔色鮮なふむの、春來りて雨蕭し、此亭々たる老杉れ蔭、數構棟を連ねて、時習寮といふ、蓋し本校五百青衫の中、七十餘顱の窮措大が、軒檐ゐ囀づる燕聲に、遠征出關の賦を眺じ、晴空ゐ渡る雁音に、思鄕想親の曲を吟じ、短檠をかゝげて、講學研道とれ黽むる所也、吁、寮生の近況果して奈何、秋既ゐ去れり、大に遠く去れり、四斗樽の如く肥えし脾肉今奈何、果して恙なき哉、三ケ月の玄冥、蟄潛の涙を滂ぎし勇魂今奈何。打たば鏘々の音果ゑて胸をついて出づる乎、這般の消息を知ふむと欲せゞ、乞ふ來りて校內運動場を瞥一見せよ、夕陽の影城濠ゐ暗くうつるも、尙ほチツトの張られ、蝶羽の如く、飜々ラツケツトの舞あり、列帛の音空を劈いて、熱球の飛去飛來するあり、無聲堂裡の叫聲は、夜に入つて漸く絕もるあり、五六七八數個の旅裝束せる健兒、隊を列ね伍を組み、蓮湖に長櫂を弄し、獨步獨吟四圍の山野を跋涉するあり、然り而して病魔の擒となるもの、一人も無矣といふゐ至りてハ、自治制愈々發達し來れりといふに至りても、時習寮萬歲あるのな、寮生諸君萬歲あるかな、萬歲萬歲萬々歲あるかあ、されど一言寮生諸君ゐ呈すべをあゐ、諸君決して忘るゝ勿れ、論語開卷劈頭の三言い、諸君が家とせる寮の名あるとを、勉旃寮生諸君、諸君若し天濶海空の膽と、富熱夥涙の情とを欠かゞ、老杉密灌の地下、大怪物傳藏の魂魄洪笑一番するもの夫をあふむ、多く疑ハず夫れあらむ乎。（馬卿）

柔道部大會概況

惡なれ小僧好て柔道を學び無聲堂の疊蹴破ゐしとありし昔はいざ知らず病魔の爲に勇氣を奪はれし今日何とて先進諸士を凌きてをゐがましくも批評ゐど試みらるべきやとたゞこゐしも編輯員の意地わるくも許して玉いざりしかを恐れゐかふ失禮ゐかふ御免を被り鈍き（二部き）筆もて批評を勝負の上に試みん（天外生）

偖も一片の掲示ハ三月六日午前八時より柔道大會の催しあるを報して且又他流の勇士と疊ヶ原に對陣するてふ風說傳ハるや寒三十日の間に腕を鍛ひし勇士の面々當日晴の勝負ゐ天晴高名手柄して月桂の冠我こそ得てくれんと野心勃々力氣味は色に表はれし雄々しさ見る目も勇ましかりし事ども有りき

愈當日とハありぬれは午前九時頃とり戰士を始め野次連追ひ〳〵馳せ集ゐ勝負も此處に始まりける

當日の組合左表の如し

一本勝負二人抜

○大外刈	福田醇一	鐵村棒成	2.m55'
○大外刈	福田醇一	中山佐之助	3.m40
（釣込足	中山佐之助	杉本勉吉）	.30
○巴投	杉本勉吉	阿部善次	.20
○大外刈	阿部善次	池田亮造	1.m30
○巴投	池田亮造	長澤泰知	.20
○○袂落	長澤泰知	澤田堅太郎	.30
○浮腰	生野團六	石田壯二	1.m25

3.m10　○裏投　石田莊二　平澤象次郎

二本勝負

第一組 4.m　×（三谷義種　鐃村祐成）

第二組 5.m35　×○浮腰　村田讓　湯本四郎右衛門

第三組 6.m　×○裏投　小林正旭　阿部元松

第四組 5.m　×○大外刈　野崎安　杉本勉吉近

第五組 3.m　○○巴投浮落　池田亮造　阿部善次

第六組 1.m30　○○大外刈大外刈　三谷義種　福田醇

第七組 2.m　○○大外刈大外刈　中山佐之助　永松文一

第八組 4.10　○○巴投押込　久保田圭右　水本常信

第九組 .25　○○巴投押込　佐伯敬太郎　植本隆太郎

第十組 1.50　○○巴投巴投　中山佐之助　長澤泰知

第十一組 2.　○○大外刈大外刈　福田醇　高橋享次

第十二組 3.　○○大外刈押込　田邊輝雄　山科祐次

第十三組 5.10　○○足拂足拂　浦五郎　澤田堅太郎

第十四組 8.　×（平澤象次郎　生野團六）

第十五組 4.30　○膝車　○○釣込足足拂　久保田整　東卿直

第十六組 5.10　○○浮腰巴投　大森篤次　○膝車　德岡料彦

第十七組 8.40　×（平澤象次郎　石田莊次）

第十八組 5.　○○大外刈釣込足　江馬圭一　深澤新一郎

三人掛

6　○○○足拂浮腰押込　山口重作　大森篤次　久保田圭右　德岡精彦

五人掛

○○○大外刈足拂腰投　高梨恂一

○押込（久保田整　浦五郎　澤新一郎　水常信　植本隆太郎）

同時二人掛

○押込（生野團六　東鄉直）　近藤他家雄

○長尾流當身体術

○長尾信閑流形　氏家春樹

○無拍子流形　町田半兵衛

○講道館投形　大島亮治　同雄治

他流試合二本勝負

6.20　○○膝車押込　江馬圭一　北野忠太郎

3.　×（島梨恂一　増井與吉郎）

5.　○○体落押込　山口重作　矢野彌三郎

他流亂捕數回

講道館亂捕

（久保田整　紅林豐治）

（近藤他家雄　大島亮治）

（近藤他家雄　大島雄治）

（佐藤龜久治　紅林豐治）

（近藤他家雄　岩崎指導）

講道館初段立合形

起倒流裏表

以下は各組合せに就ての記事短評とす

饒村君と福田君の取組と稽古の日數淺き割合よ腕力の搏ち合ひ少かく福田君の大外刈の見事ありしい寒稽古の功ゐと思ハるたり。中山君も亦稽古の數い少あかりしも日頃の睡眠家平澤君と競ひて鷄鳴と共に起き上り三尺有余の雪を蹴散らー廣坂の街道狹しと濶歩しあかふ寒稽古よ出席せられたる功ゐりて福田君を大外刈にて打伏

せらるゝは見事なりし今后益々精勵あれ。次に杉本君は中山君と比して其体軀は微弱にして勝負如何にと怪しみしも君も敏捷に働かを釣込足を以て勝を制せられしは是れ君の特技か聞くなるゝく君は東京仕込の貴公子なりと流石御手際立派に候。特意なる杉本君を打て懸りし勇士と これこそ阿部善君とて体軀如何にも小なるをども亦これ一個の好敵手僅か二十秒立つか立さぬに杉本君を倒しさるゝ天晴々々。池田君は連りに巴投を試みたるも其功なく大外刈にて勝利を得たるハ自然体をくづさざるに意を用ひ過きさるに由るゝ今后の御勉勵を切に祈る。次きハ柔道部に技の優なるを以て名ある澤田の堅君と熱心家の長澤君との取組を評せんに年齢体軀共ゝ好一對の勇士技術の優劣も等差なく共る奇麗なる体のなるしに日比鍛錬の程も現れて天晴れ業やと見受られたり互に優然と戰ひたる結果見事勝利は長澤君に歸し君は本日一本勝負中金冠を載かれさり。新手と入れ變りたるは心照流仕込乃生野名は團六君と石田莊二君なりが是れ恰も他流仕合と等しきものなれハ面白き勝負ならんと思しひも生野君ハ哀れにも腰投けにて討死す。平澤君ハ跳り出したり君は柔道部の古參にて其技も熟練しさる人なれとも其業を掛くるに躊躇するハ君の欠点か然るとも雖も三分十秒の終りに裏投を以て石田君を敗るしハ年來の功見るべき

二本勝負

第一番ゝ名乘り合ひしは饒村君と三谷君饒は瘦軀三谷君も筋力逞しき好漢勝負如何なと見る間に只腕力の闘爭のみにて引分とはなりしハ己むを得さる点あるべし。第二回湯本村田兩君湯氏は短よして村氏長軀其差五寸程なりし爲め村田君れ終始体を屈め働難き点ハ記者も同情を表すれとも敏捷なる動作なかりきは寧ろ自然体よ固まり過きさるゝと思されたり然れとも君の浮腰ハ大出來なりし。第三回小林君と阿部君の勝負は敏捷活潑にして前よ在ると思へは后ゝ現れ龍虎野に闘爭か如く沛然雲起り風生するの思あらしめさり小林君も去るをれ敵の虚を見ること敏ゝして裏投を以て敵を倒し阿部君殘念とや思ひけん連りにあせりても其功なく遂よ一本勝負にて止まりしは惜しむべし。第四回野崎君と杉本君の立會隨分面白かりし由なれども小僧偶所用るて見るとを得さりき。第五回ハ阿部善君と池田君にして阿部の早業人をして驚かしむ池田君は固まり過るのみなふず躊躇する傾向あり。第六回三谷君福田君は三谷君の勝利當然なふんの。第七回永松君中山君の兩勇ゝして永氏は日を積むと久しく中山君は僅々一ヶ月の稽古なをば永氏の勝利ハ論する迄もなし。第八回腕力自慢の兩勇士潑剌々地四十疊の隅より隅に走り廻るし結果は如何勝敗は天に在り牡丹餅は棚にあり久保田君の勉强全局の勝利を其手ゝ握れり。第九回佐伯君は技を某所よ學びし人其勝利は當然と云ふべきのみ。第十回長澤君は澤田君の好敵手中山君と組合せさるは無理との下馬評尤も千萬。第十一回福田君ハ敏捷ゝと非らずと雖も高橋君の遠慮過ぎたる結果名譽を福田君よ握らしめさり。第十二回山科田邊兩君は勝負と其勝利田邊君に歸すべしとの下馬評なりしも山科君の注意周到熱心に働かれし爲め大外刈にて敵を倒し直ちに押込まをし敏捷と御手柄田邊君は敵を侮ふをしかと思ハれさり。第十三回浦澤田兩君体軀技術俱に優劣なく好敵手なりし。第十四回平澤生野兩君亦矮小の好漢技術も等しく甲乙差別なるをし爲め中原の鹿手に落ちずして止しハ互に御遺憾千萬。第十五回久保田東郷兩君も流

石は運動家を以て名ある若殿達敏捷に立廻り誠に奇麗なる勝負にして久保田君の氣遲きなかりしは一進歩の兆の將來有望乃驍將達益々勉めよ。第十六回大森君は當時日の出の勇士德岡君ハ老練れ驍將互に特技を奮ひ千變萬化に馳せ廻り危機一髪人をして歡聲を出さしめたるも流石と云ふの外なし。第十七回平澤石田兩君ハ勝負ハ人をして歎息せしめ今少し敏捷にやられてハ如何。第十八回江馬君三級に上進しさる御大將深澤君四級に上進しさる技あれと雖も江馬君例の得意の虎ハ卷と恃める釣込足に敗られしは君も亦遺憾なるべしん。

三人掛五人掛他流仕合ハ今回始めて行われしもあれば結果や如何と吾も人も思ひしとあれば此時より野次連の奮發せるか狂せるか如き先つ第一に名乘りをは名も恐しき五人拔の勇將山口の重作三人を愚り十人位は朝飯前の仕事と云はめ許りの顏して場の中央に仁王立して敵や懸れと待ち構へたる有樣物凄く場裡寂然として一語の漏るゝものなし久保田圭君は直ちに敗れ德岡大森の二勇士暫時挑み戰ひしも遂に山口君をして再ひ三人拔きの名を爲さしめたり三人勝負にして敵ハ休息せしむるハ猶豫を與へしハ失錯なるべん。

高梨君も亦紅白勝負に月桂冠戴きし勇者此頃は病氣の爲めの其業を廢せるをも昔し取つたる杵なれば五人拔きハ瞬さく中と思ひしハ浦氏を足拂ひにて倒すや危一髪水木の剛力に取組まれ押込にて敗を取たる有樣哀れ最后の涙を道場に止めることかと人をして汗を握らしめしも十秒の懸聲今は五六七秒飛で矢の如くあはれ一本と呼はるんとする一刹那流石と勇將勃然と跳起きて腰投ハて見事水木君を討倒せり何を小しやゝく現れたる紅顏の若殿久保田ハ整君敵の弱手付込み腰業を掛けしも七分ハ殘し此處殘念を敵と動と打伏せ押込にて首打搔きたるハ天晴乃御手柄高梨君と稽古中傍見し語を發せらるゝハ高級者とおては御油斷あらん。近藤君ハ肥大剛力の猛漢二人位はと思ひしも敵も去るもれ近藤氏を打ち倒し哀れ最后を止めしめたるハ東郷君の働き天晴々々。

他流諸師範家の形は何をも勇壯活潑ゐして猛虎の鬪ふか如く吾人の禿筆之を記する能ハず。

江間君北野君の仕合は人々の待ちし所互に一禮して立上るや敵ハ組打ちの達人直ちに襟を絞り取り突込て來るのをにてあらん限りの腕力を盡くしたるハ江馬君も苦心せられしも流石ハ校内屈指の柔道家敵の力を利用し特意の膝車にて見事打倒し押込ハて組打ハ達人を敗りしハ見る者皆流石の一聲を發するの外なかりき。次ハ高梨君と增井君の組合增井君は居捕りが得意か終始片膝立ちにて遂に立上らず高梨君と優然腕組みしつゝ片面笑を含み敵を見下したるまゝ敵に降らしめさるゝ天晴の勇士其意氣天を突き人をして無言の中に降らしめさり。山口君矢野君の立合矢野君は山口君の足に搦み付きたるまゝ放さハこそ此處を先途と戰しハ面白かりき山口君も少し閉口しさる樣子ありをも体落し押込みにて敵を打倒し月桂冠は其手に落ちたり然りと雖も他流各々得意ある點あり是を以て技ハ優劣を定むべらず爾來益々互に技と鬪し長短を補ハゞ其功大ならんか。

大島亮治同雄治君花ハ顏麗はしく小さき稽古衣を纏ふて進み出で最あとげあく巧みゐ困難なる投形を行ハれをゝ來賓席も學生席も動搖めきて拍手の響暫らくも鳴りも止まず校長閣下も滿面に笑波を現ハをたり。

久保田君と紅林君の亂捕は奇麗と云ふの他あは

れとも近藤君と大島君等の亂捕ハ唐子と仁王乃戯るゝ如く腰業眞捨身なしなか〳〵巧みゝ取らゝ玄い賞歎の聲を發するゝ至らゝ先殊ゝ腕力を以て鬪ふ他流れ仕合と比して優美の感を起さし先たり。

佐藤君紅林君の初段立合形紅林君ハ受身佐藤君は取也兩君共ゝ得意とする所其壯快思ふべゝ近藤君と岩崎指導の起倒流形莊嚴にして深遠なる懦夫をして建さゝ先たり。

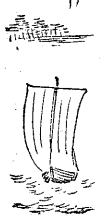
（劍術試合概況ゝ紙面の都合にとり次號に讓る）

退任乃辭

歳華瞬轉梭の如く、日月流水の東歸するに似ゝ、數ふれは、生等誤て諸兄れ清薦を辱ふし、叨りに卑識駑才を驅つて、囑望の萬一を完ふせんと欲ゝてとり、匆茫夢の如く既に一星霜、春風萬々春塘ゝ滿ちて今や任盡き、將に本號を以て筆硯れ曠囑を解かんとゝ。想ふゝ過去の一閲年、敢て人聽を聳動するの文章なく、校風を醒刷するの議論もなく、腐々紛々、徒に澁筆蕪稿を束ねて無用の套語を臚列し、濟々ゝる校友が、絢爛花の如き瓊才瑶想を懷滅して、職責の大半と懷抱の概要とを湮沒ゝるの罪は、悲悔俯項辭すべかふざるもれ多々なり。此れ間或は寛弘なる校友の啓發と懶導に待ちて、一縷の寒見微烟を誌上ゝ吐露し、蕩乎ゝる風紀校風の幾小分を喚起したる意志なきゝ非らざるも、固より微々薄々として殆と肉視すべからざるが如き、反て愈益々失行瑕瑾れ甚ざゝれを暴露するゝ過ぎざりしのみ。然れとも我校友の深仁にして温雅なる窮を哀み瑕を悼みて遂に一言の罪責に及ぶ處なく、生等幸ゝ非德素食の鞭呵を逃れて、藹然茲に犬馬の勞を恬退するを得る所以のもの、憂心自ふ忡々、背汗淋漓として俛謝せざふんとするも豈に得んや。嗟吁、空囑矯僞の咎め、生等之を釋く果して何れの日ぞや。擱筆に莅ゝ恭く管城子を洗つて、乞骸骨ふの辭をなすと云ふ、

編輯員一同に代りて　遠山熙

明治卅年三月十日



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せぎ

一雜誌上ゝ雅號のみを記載するとを許せども姓名ゝ必ぎ編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありゝし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものハ一切掲載致さゞるべし

明治三十年四月十二日印刷
仝　年四月十五日發行

編輯兼發行者　河原始二　金澤市廣坂通第四高等學校時習寮
印刷者　春秋原在文　金澤市石浦町七十六番地
發行所　第四高等學校北辰會
印刷所　活版合資會社　金澤市高岡町三十四番地